

小田原史談

第 179 号
発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内TEL(24)0637

砲兵陣地

敗戦の色こ
く敵の本土上
陸の候補地と
して相模湾一
帯が考えられ
るようになり、これに対応
するため、曾我山一帯に
砲兵陣地を構築(山腹にトン
ネルを造る)する事となり、
先遣部隊として鳥取の突一
〇一三四部隊が駐留(軍隊
が一定の地域に長く留まるこ
と)した。順次岡山の工兵
隊、同輜重隊(軍隊が必要と
する兵器・食料・衣料などはこ
ぶ部隊)、三島重砲隊(大砲
の口径が七五㍉)が着任し、

八月には三千人近くに増加
し、曾我、下曾我、国府津
の小学校、寺院、一部民家
に宿泊していた。

トンネルの場所は古老に
聞き、地主を頼りに調べた
ところ、曾我山では図一の
九カ所が判明した。当時こ
の工事に従った菅本建設の
社長によれば、トンネルを
掘った兵士は三交代で、現
地に露営をしていたそう
だ。

トンネルはすべて「つる
はし」と「のみ」でほった
もので、内部は木材で補強
がしてあった。最大のもの
は柄沢(播磨の窪「小田原史
談」一六八号)で約三〇m先

曾我山の砲兵陣地と 下曾我駅の空襲

市川 一郎

太平洋戦争も初めは華々
しい戦果をあげていたが、
日がたつとしだいに負け戦
となり、昭和二十年にはア
メリカ軍による東京を始め
大都市の空襲が、ラヂオ、
新聞に報せられる事が多く
なつた。

松根油

南方の占領地を米軍によ
り退去をやむなくされ、外
地で生産していたガソリン
が入手困難となり、代りに
松の赤身を乾留して造つた
松根油がために使われる
ようになった。

松根油の原料は昔切つた
松の木の根の部分で、外周
の「しらた」がくさり、中
心部の赤みが地中に残つて

いた部分を用いた。これは
俗に「ひで」と言い、脂肪
が多く良く燃え、風にも強
く火持ちが良いので、筆者
等は子供の頃、春先の夜「た
んぼ」の水たまりや、小川
で「どじょう」とりをする
とき「かがり火」の材料に
した。

根のほり出しやはこぶの
は、兵隊と、徴用(国家が
国民を呼び出して一定の仕事
につかせること)された若者
たちで、上曾我の農協前広
場と、宗我神社の鳥居前と
で製油した。

この時、神明神社跡地
〔小田原史談〕第一六九号〕
の松根もほり出されたよう
なので、その場所はわから
なくなつた。

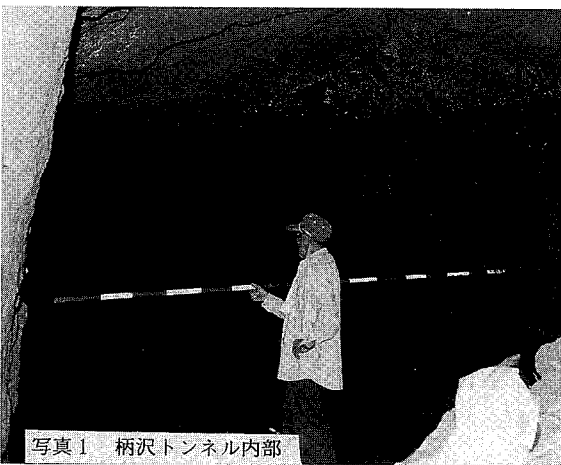


写真1 柄沢トンネル内部



写真2 柄沢トンネル入り口

で三方に分かれ、各々約一
〇mまで進んだ所で終戦に
なつたそう。他のトンネ
ルは入り口が埋め戻されて
いるそうだが、当初は入り
口上部の土土が落下して一
部埋まっているだけで、内
部は当時のままである。そ
の状況を写真1、2に示す。
他所の進行度は不明であ
る。

下曾我駅空襲

敗戦の色濃くなり食料不
足もその度を増し、町の
人々は着物や帯を「いなか」
に来て食料に変える人の姿
も多くなつた。このような
事情から国は蜜柑やその他



写真3 久保寺酒店神棚(鉛筆は弾道を示す)

飛行機は又山上からあらわれ機銃掃射

飛行機は又山上からあらわれ機銃掃射され、幸にもトリ、洋平の二人は銃弾が当たり死亡され、克人氏は足に目前で大負傷された。

飛行機は又山上からあらわれ機銃掃射され、幸にもトリ、洋平の二人は銃弾が当たり死亡され、克人氏は足に目前で大負傷された。

小川武明氏は飛行機が小田原の方から飛来するのを家族と共に見ておられ、不幸にもトリ、洋平の二人は銃弾が当たり死亡され、克人氏は足に目前で大負傷された。

ここは曾我山の中腹で水平より約一五〇mを、曲がりくねった道で高さ約

七五m登る所がある。今は周囲が蜜柑畑になっているが、昔は山林だったので、山から材木を出す時、この上で材木を車から下ろし、材木は林の中を直線にすべらして下ろした。



現在の下曾我駅

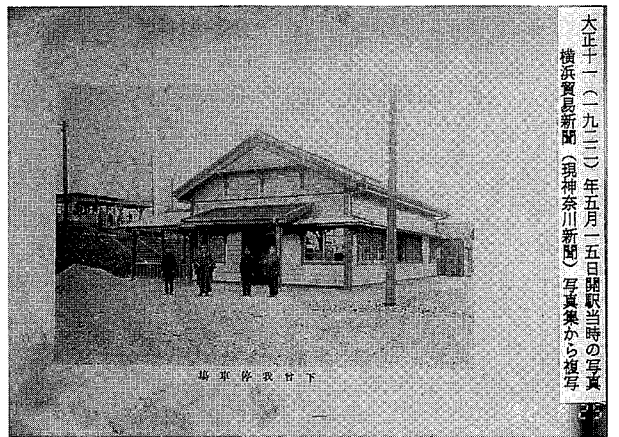
の果樹を二割切つて、食料を増産するようにした。筆者も国の政策に従い石畑の蜜柑を切り、薩摩芋を植えた。

八月五日に芋の蔓かえしと蜜柑の下草取りに行き、昼食をとつて昼休みをしていた時、空襲警報が発令されたが、山の中なのでのんびりしていた。そのうち山の上からごうおんと共に飛行機が飛び出して来て、頭の上で機関銃を発射した。銃弾は駅の鉄道購買部(図2)付近に停車していた貨物列車の機関車のボイラー

に当たり、すごい勢いで蒸気が吹き出した。

註 鉄道購買部 鉄道職員にだけ生活用品を売る所

飛行機は小田原の上あたりまで行つたかと思うと引き返して来た、すると駅前広場に置いて有つたドラム缶五、六本の松根油が燃え上がり、近くに野積みされてたいた砲弾が爆発し、砲弾や破片が四方八方に飛んで行き、遠いものは一、〇〇〇mぐらいまで飛んだ。不真面目の話だが爆発が誘発されるので、まるで花火を

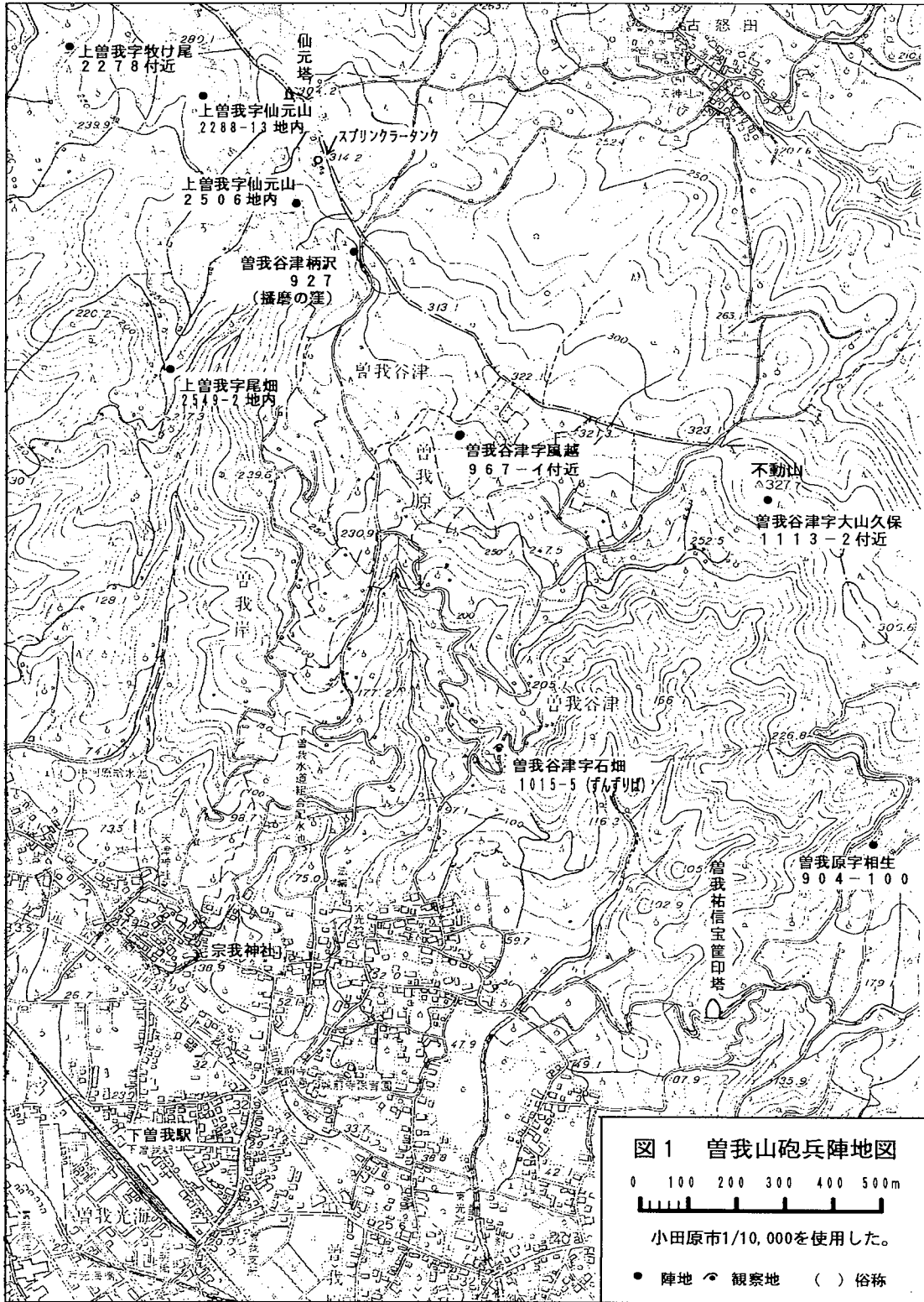


大正十一(一九二二)年五月一五日開戦当時の写真
横浜貿易新聞(現神奈川新聞)写真集から復写



大正十二(一九二三)年九月一日関東大震災の被害
横浜貿易新聞(現神奈川新聞)写真集から復写

状態/前場車停我下線近再東道鐵



追記 砲弾が人の集まる
駅前であり危険なので、
下曾我村役場が軍と相談
し、六日に運び出す事に

なっていたそうだが、一日
違いで残念なことになっ
た。

終わりに
以上終戦時の曾我の姿の
一端を記したが、取材にあ

たり何十年も人跡の入らな
かった急な山中を、倒木や
藤蔓をたよりにして、老人
をいたわりながら現地以案

内して下された、神保光定、
柏木一郎両氏を初め、取材
に協力をお願いした方々に
厚く感謝する。
以上

付表

順	当		時	罹災状況	現
	名称	名称			
1	鉄道購買	梅の里センター	焼失		信号機械室
2	砲弾	梅の里センター	爆発		
3	貨物上屋	梅の里センター	焼失	?	
4	砲弾	梅の里センター	爆発		広場
5	松原油 貯蔵タンク	梅の里センター	燃焼		
6	倉庫	山本米穀店	焼失		山本米穀店
7	相模屋	相模屋ストア	焼失		相模屋ストア
8	横浜銀行	横浜銀行	焼失	長谷川好春死亡	横浜銀行
9	久保寺酒店	内山ストア	半焼	銃弾神棚貫通	内山ストア
10	77733 運送	杉崎モーターズ	焼失		杉崎モーターズ
11	正栄堂	正栄堂	焼失		正栄堂
12	平野料理店	内野アパート	焼失		内野アパート
13	倉庫	深沢電気店	焼失		深沢電気店
14	兵藤電気店	郵便局	焼失		郵便局
15	郵便局	アパート	焼失		アパート
16	小川武明	小川武明	死亡 死傷 死傷	小川平太郎 小川克人	

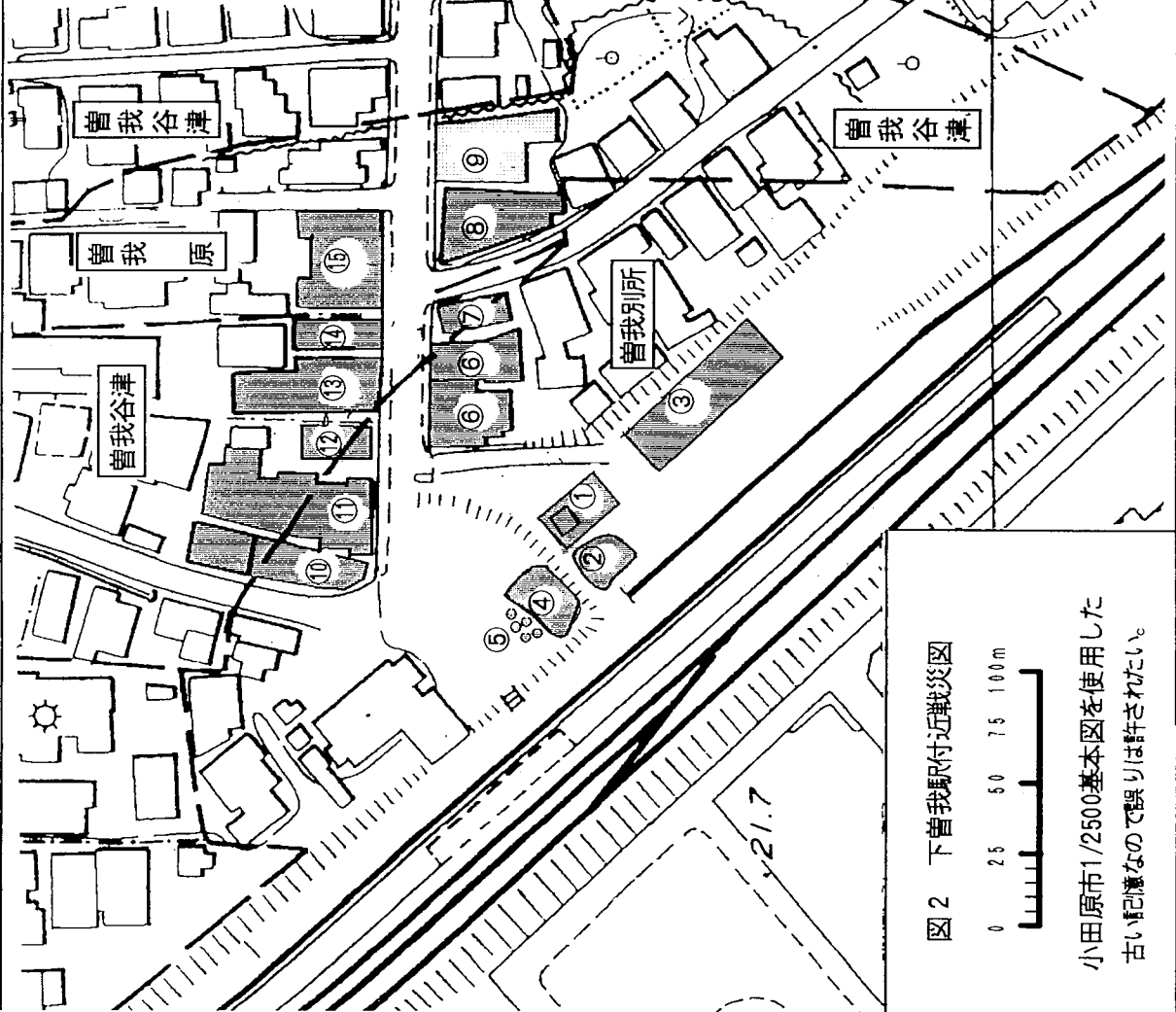


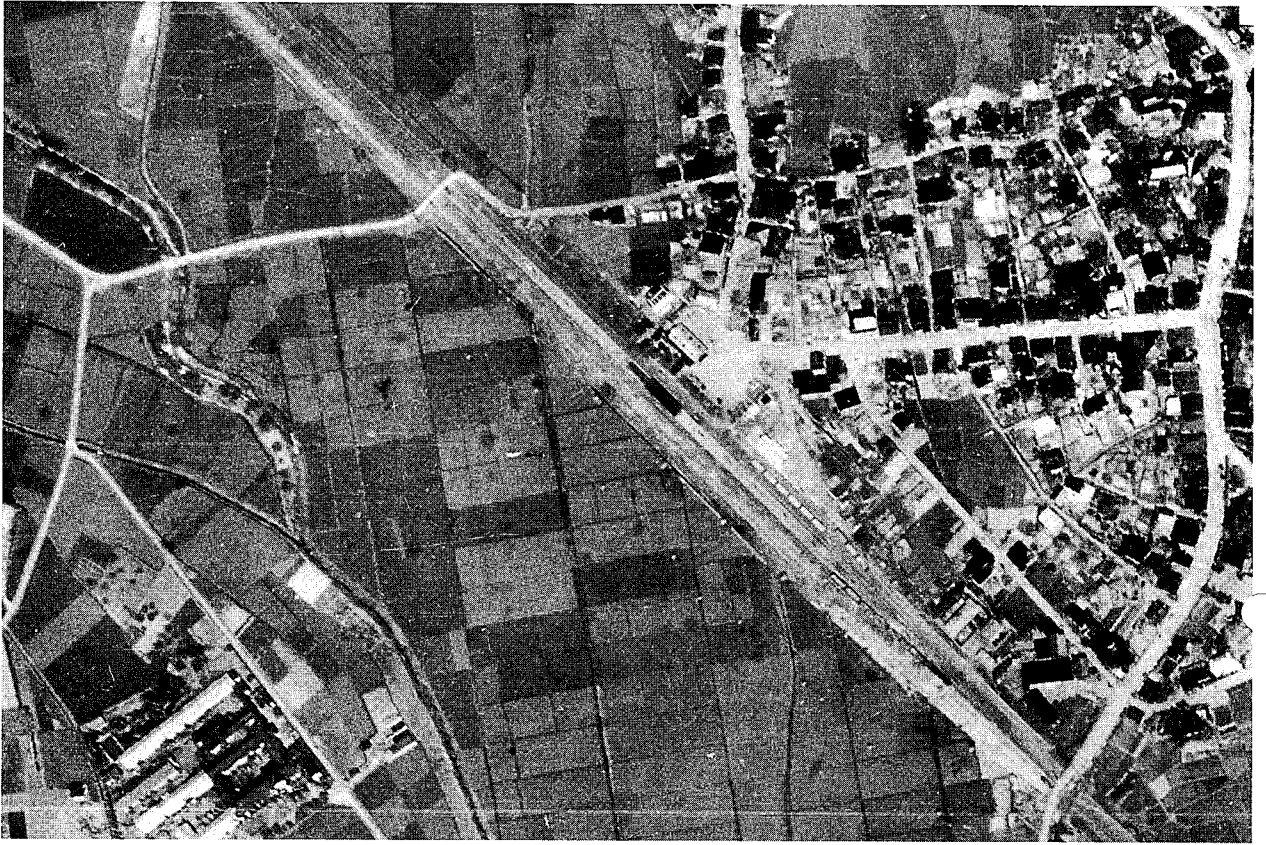
図2 下曾我駅付近戦災図

0 25 50 75 100m

小田原市1/2500基本図を使用した古い記憶なので誤りは許されたい。

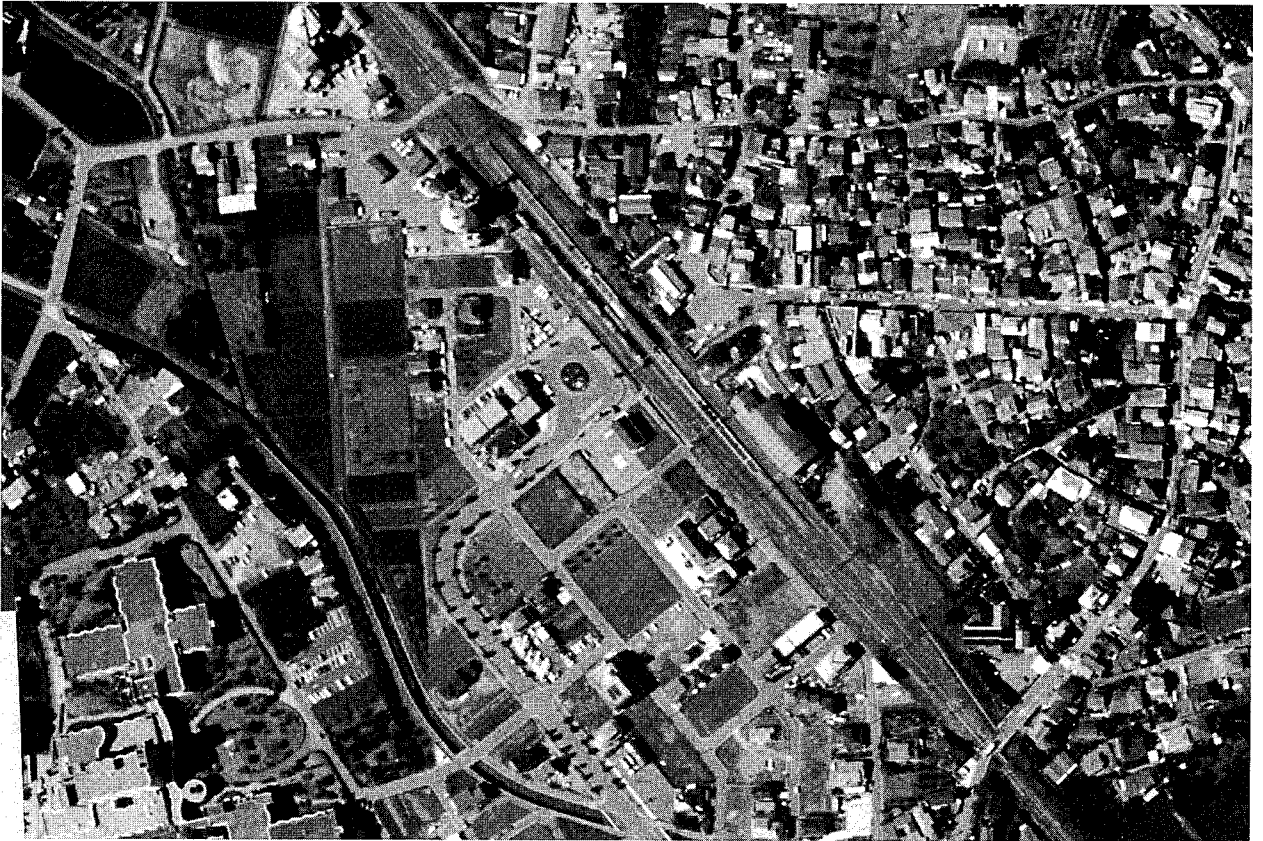
空襲の跡も生々しく残る下曾我駅周辺

昭和二十一年（一九四六）八月
アメリカ軍撮影



戦災の跡影もない下曾我駅周辺

平成五年（一九九三）八月
国土地理院撮影



国土地理院 平成11年9月21日第521号にて掲載許可（2枚）

小田原叢談 (三十八)

石井富之助

大磯の鴨立沢

大磯の鴨立沢といえ、西行法師の名所古跡として有名である。

心なき身にもあはれは知られけり

鴨立つ沢の秋の夕暮

この鴨立沢について土肥経平のあらわした『風のしがらみ』という本のなかに、面白い話が載っている。

百科辞典によれば、土肥経平(一七〇七—一七六二)は岡山藩池田侯に任せ、禄四千二百石、有職故実に精しくつとに一家をなし、また和歌を姉小路実紀、烏丸光陰、日野資枝等に学んだ、とある。非常にたくさんの本をあらわしているが、『風のしがらみ』は慶長年間から安永年間にいたるまでの御製をはじめ宣命、賀表、詩歌、文章等を採録したものであ

る。

寛文元年(一六六一)に大納言雅章卿が関東へ下ったとき、大磯に誰が名付けたのか、鴨立沢という所があった。ここで、

あはれさは秋ならねども知られけり

鴨立沢のむかし尋ねて

この沢のあたりに大変風流に住んでいる僧に話しかけて、

心あれやあるじかをし
て住なして

鴨立沢に結ぶかり庵

大納言は京都に帰って、この歌を天皇に御覧に入れたところ、西行法師の心なきの歌は、どこでもよい鴨のとび立っている沢であつて、このところだとさして詠んでいる歌ではないのに、今お前がここを鴨立沢

という名所にして詠んでいるのは非常なあやまちである、とおおせになつて、しばらく出仕をとめられたということである。

大納言飛鳥雅章の家は代々和歌をもつて知られた家柄であるから、雅章も相当の歌人であつたのにちがいないのに、それを頭からたしなめておられるところをみると、歌の道にかけては天皇(寛文元年には後西天皇)の方がはるかに上だつたようである。ここで面白いことは、そんな間違いをするものは当分出仕を差しとめるといわれたことで、歌の道のきびしさがよくうかがわれる。

鴨立沢については、朝川鼎『善庵随筆』の中にこんなことも書かれている。

西行の鴨立沢の歌は、

もとは、沢辺に鴨がとび立っている秋の夕暮

が大変淋しくあわれである様子を詠った実景

の歌であつて、鴨立は沢の名ではないのを、

元禄の頃に、宗雪居士(宇野宗雪)が一時の思

いつきでこの所こそ西行法師の鴨立沢と詠歌

した沢であるところじつめたのである。戸田茂睡の著わした『名所不審相承歌』という小冊子に「大磯の鴨立沢なども、近い頃に宗雪と

いう入道が名付けたことであるが、今では西行法師が、身にもあわれは知られけりと詠み給うた所になつた」とある。それを更に、宝永年中に俳諧師の三千風(大淀三千風)がついに庵を結んで鴨立庵と称し、もつともらしい碑などを立てたので、今では和歌の一名所旧跡になつてしまつたのである。

もう一つ田中仲宣という人の書いた『おこたり草』という本には、

相州に鴨立沢といふところがある。行つて見たところ、沢辺ではなく海浜であつた。もつとも、西行法師が鴨立沢と詠んだのは、もとより名所でもなんでもなく、ただ鴨のたつ沢辺で詠んだということである。

これらの引用文を読むと、名所旧跡がどんな風にと、作りあげられていったか、その筋道がよくわかつて面白い。

こんなことを書くと、だまつていればよいものを余計なことをいうと、大磯の人におこられるかも知れない。実際、鴨立沢が西行法師のほんとうの古跡であろうとなかろうと、しろうとのわたしたちにはどっちでもよいことである。いやことによると、古跡だとしておいた方がしあわせであるかも知れない。何も知らずそう思い込んでいれば、結構そこで西行法師をしのぶこともできるし、第一「西行まんじゅう」という銘菓もすなおにおいしいと思つて味わえるではないか。

全国にはこれと似た名所旧跡がたくさんあるようである。そして、そこを訪れる人々はまったくの理屈ぬきで、それぞれの思いにひたっている。名所旧跡というものは、なまじつかなせんさくなんかせずに、純真、素朴にそのムードにとけこむ方が、むしろ楽しいのではなからうか。

私の青春 ②

菅沼 博

敬礼は軍紀の象徴

「軍紀八軍隊ノ命脈ナリ」「服従ハ軍紀ヲ維持スル要道タリ」
〔軍隊内務令〕

入校式までは食堂への往復等は軍服ではなく、体操服で行っていたが、起居動作についてはあまりやかましく言われなかった。

しかし、入校式後は軍服を着て起床から消灯まで過ごすことになり、すぐに困った事が起きたのである。

それは我々十七期生と十六期生との見分けかたであった。服装は全く同じで先輩と後輩を区別すべき何物もなかった。

しかし、当初から何の不便も感じなかった。ちゃんと欠礼せず、上級生には何処で会おうとも敬礼していたのである。

どうして同じ服装で外見上同じで欠礼しないで、見分けることができただけであろうか。

それは眼光と身体のかなしであった。第一に十六期生の眼光は十七期生と比較して格段と異なり、あたりをへいげいしていた。自信に満ちた顔付と身体から発散している精気は十七期生には無かったのである。

遠方からでもすぐに見分けることが出来た。それが六カ月後の十六期

生の卒業まで続いたのである。そして、先輩の卒業までこの見分けかたは変わらなかったのである。

先輩の十六期生が卒業すると、入れ替わりに十八期生が十九年四月に入ってきたのであるが、私自身に反省させられるような事があった。

いつだったか、それは食堂に行つた帰りの事だったような気がする。十八期生が前方から来たが、私に欠礼したのである。彼は私を背の小さい十八期生とも思つたに違いなかった。

道路上で擦れ違う寸前に「敬礼せんか」と気合を入れ入れて怒鳴つたのである。

彼は驚いたように敬礼をした。私は厳正に敬礼し行き違つた時、私の中隊に配属されていた見習士官と行き会つた。勿論、私は厳正なる敬礼をしたがそのとき、彼は答礼を返しながらかに言つたものである。

「中々張り切つておるな」と。

見習士官に張り切り少年を見せたのはまあよいとしても、十六期生が在校していたとき、遠くに先輩がいてもすぐに見分けられた、あの眼光と身体から発する覇気、それが私は未だ出来ていないのかと思つたものであった。

家族の面会

入校式が終わつて一週間も過ぎただろうが、我が家の兄重忠から一通の封書が届いたのである。

一番始めの書きだしは十一月七日と書いて二線で消してあった。そしてそのまま行を変えて健康に変わりはないかというような書きだしで手紙は綴られていた。

当時は紙が大切な時代で、軍隊の中で葉書が手に入らないので、兄に度々手製の葉書を作つて送つてくれと頼んだものであった。そのような時代なので便箋を新しくして書き直すことなく二線で消して書き改めるのは当り前のことであつた。

しかし、この消してある十一月七日の日は何を意味するものか、私はその日付を見て全てを理解出来たのである。

私の記憶に間違いがなければ昭和十八年十一月七日は日曜日だった筈である。

家族で面会に来るなど直感したのである。

入校式が終わつて一週間位過ぎた頃であつたが、毎日が忙しく時間が早く過ぎるようでもあつたが、日はゆつくりと過ぎて行くようにも思えた。

起床から消灯まで寸暇の余裕も無かつた。あれから半世紀以上過ぎた今となつては、話しても書いたものを見て現代人には軍隊生活に余裕

が無いという事が理解出来ないであろう。

時代と社会の仕組みが変わつてしまつたのだから。

十一月七日の日曜日が待遠しかつた。戦局は急であつたが、日曜日は休みで半数が外出出来るようになっていた。

入校したばかりなので、毎日曜日ごとに面会者は多かつた。その日の確か午後の早い時間であつた。週番下士官から面会の通報があり、私は衛兵所の裏にある面会所に行つた。

面会所は面会の父兄と入校したばかりの飛行兵で一杯であつた。母と三郎・巳知子が来ていた。

確か兄重忠からの手紙で面会があるということを知つたのであるが、兄との面会の記憶がさっぱりない。

面会所の机の上に広げられた風呂敷包みの中身は、我が家の庭で穫れた甘柿と母手作りのぼたもちであつた。

何時も空腹でいたにもかかわらず、その時は持つてきてくれた食べ物にあまり手が出なかつた。昼過ぎの早い時間の為だったのかもしれない。

あまり食べないので母は少々心配しているようであつた。

その日は秋晴れの良い天気の日であつたが、少々風があるようであつた。何を話したのだからか、自分の健康と毎日の生活について話したに違ひなかつた。

内務班には新聞も無ければ、雑誌もない。ましてラヂオさえもないのである。

情報が無ければつい話の内容は自分の毎日の生活についてとなってしまう。

面会が終わって母達が帰る時、私は衛兵所の前まで連れ添って歩いて行った。そこから先は校門であり、我々飛行兵は校門から出ることは許されていなかった。

私は校門の内側で母達の帰るのを見送った。母と弟妹達は暫く行って校門の前の砂利道で立ち止まった。そして母を中心として横に並び私の方に向き直った。

暫くの間、そのままの姿勢で私の方を見つめていた。母は小首を傾げ、口を引き締め寂しげな目で私を見つめていた。弟の三郎も真剣な顔であった。

妹の已知子の顔にも笑顔はなかった。木枯らしのような風が埃を舞い上がらせ母の着物の裾をヒラヒラさせていた。

私は直立不動の姿勢で立っていた。その時、私の頭の中をよぎった思いは

「ああ、みんな寂しいんだなあ」という事であった。

暫くして、向きをかえると私の家族達とはとと歩いて遠ざかっていった。埃の立つ道を力無く歩く様は私の脳裏に今でも鮮明に焼きついている情景である。

営内生活

少年飛行兵学校の生活は、家庭で過ごしていた時のような自由な時間が全く無かった。朝の起床から消灯までの間は時間割りがびっしりと組まれて、便所へ行くのにも初めは時間がなくて苦労したものである。

しかし、直ぐに私は起床前に便所に行くようにしたのである。この癖なのかもしれないが、今でも便意で目が覚める事が多い。

便所は軍隊では厠かわと言った。これと同様に、一般社会で使っている名称が通用しない事が多かった。軍服の上着は軍衣、ズボンズボンは軍袴こしたと言い、シャツは縹びんば、モモヒキは袴下こしたと称した。この袴下は夏でも着ていたものである。

ポケットは物入れと称したが、中々これが直ぐに口に出てこなくて、どれ程なぐられたことだろう。

洗濯は、内務班の建物の後ろ側の洗濯場で行なった。この洗濯も中々洗濯の時間が無いので、今考えてみると、少々不潔な生活をしていたのかも知れない。

飛行兵学校の一年間に、歩兵としての基本は全て習得させると言う目的があったらしい。このため午後は必ず教練で、持たされた小銃は九九式小銃であった。

内務班の廊下側にある銃架に内務班全員の銃があった。帯剣は班内の寝台の後側の壁に掛けてあった。

午後の演習が終わって、やれやれと思ひ銃の手入れをして銃架に納め、さて夕飯の時間と思つた時、週番下士官が回って来て、銃架の小銃の引き鉄を一つひとつ引いてゆく。「カチツ」と音がする。

内務班の中で時として一人位不注意の者がいるものである。勿論、その者は殴られるか、腕立て伏せか、捧げ銃をへばるまでさせられるか、とにかくひどい制裁が待っていた。

音がしたのは、手入れをして一番最後に引き鉄を引き撃系先頭を落とすしていなかったからである。

毎日が忙しく、夢中で過ごす連続であったが、入校して一カ月過ぎた十一月二十三日だったと思う、その当時は新嘗祭にいなめと言っていた現在の勤労感謝の日に、初めて引率外出があった。

その日は学校の大部分の生徒が引率されて、代々木にある競技場に行つた。確か十月の幾日か学徒出陣式があった、あの場所だったのではなからうか。

内容は運動が主体の学生達の競技であったような気がする。その場所で我々陸軍少年飛行兵の宣伝のため、競技の合間に、先輩の十六期生による鉄棒の演技が披露された。

十六期生の中からよりすぐられた幾人かが、大和魂だとか、大車輪等の演技を一般の観衆に見せていた。我々は観覧席の一部で見物させてもらったのである。

素晴らしい演技がそこには展開されていたが、我々飛行兵の全員が、その様な演技者の集団ではなかった。

毎日鉄棒にぶらさがっているわけでは無いので、特に上手な者を選抜してやらせたようであった。

入校した昭和十八年頃、課業は日曜日は休みで、巷に言われている海軍の月火水木金の休み無しの訓練の連続というような事はなかった。

日曜日の食事の行き帰りに良く目にしたのは、上等兵の階級章をつけた先輩の姿であった。所沢に整備学校があったのでそこに入校している十四期生であったと思われる。

或るときなどは、先輩の十四期生の上等兵が一等兵に気合いを入れているのを目撃した事がある。

恐らく、当時在校していた折、中隊付のラツパ手に気合いでもいれたのであろう。軍隊では階級が絶対である、上等兵になつて所沢整備学校から歩いて母校訪問をしたのであろう。

上等兵に進級

昭和十八年秋の頃の事であるので十月一日付けで上等兵に進級したのは、十四期生の筈である。

我々は東京陸軍少年飛行兵学校を一年で卒業し、専門の上級学校で半年間勉強した後には上等兵に進級する事になっていた。それまでの間は階

級は無く、星の付いていない階級章が襟に付いていて、その隣に兵種を表すプロペラの飛行兵の記章が付いていた。

一般の兵は終戦間際であれば話は別になるが、中々階級は上がらなかったようである。飛行兵学校に在学中は階級が無いので、前述の十四期生はその一等兵に在学中に気合いでも入れられた事があったのであろう。

その先輩の上等兵の階級章は襟の他に肩にも付いていて、それは飛行兵の証であり、当時全く格好よかつたものである。

我々の住む管内班の前は教室があり中隊本部があつて渡り廊下でつながっていた。教室も管内班も共に二階建てで、二階は十六期生の先輩が使っていた。

教室は午前の学科に使うが、夕食後にも使った。確か十九時から二十一時迄は自習時間であつた。

その間に学科の復習をし故郷の両親や友人に手紙を書き、その日一日の反省日誌を書かされた。

反省日誌の内容は一般に思われている業務日誌とは性格を異にしていた。大日本帝国軍人として今日一日にかか過ぎたかという内容である。精神的内容を反省を書かされるのであるが、反省すべき内容も無く一日を過ごした日などは書く内容が無く四苦八苦したものである。

ある生徒等は幾日か書かないで誰

かを見せてもらつて書いていたが、どんな内容を書いていたのだろうか。

自習には区隊長も班長も付いていないことのほうが多かつたが、静寂そのものであつた。

中には居眠りしている者もいたが、大半は真面目に予習・復習をしていた。

その頃、私の楽しみは中学同級生から送られてくる私製新聞であつた。その内容は時局の事や中学校の行事、そして柳田君の文・絵による小説まで記載されていた。

これは班内の同期生にも評判がよかつたものであつた。

帰省

勉学と訓練で忙しい毎日であつたが、その年の暮れには待望の帰省が待っていた。

正味七日間の帰省であつたが、遠い九州出身者等遠距離の者には幾日か前後に日数を付けて、七日間を故郷で過ごせるように配慮されていた。

入校して三カ月ではあつたが、毎日指折り数えて待っていた。帰省の時の服装は、背囊せいのふと帯剣たいてんで、背囊の巾着は米であつた。

米の量は四升二合で一日六合の割合で軍隊では米を炊いていると教えられていたが、全くその通りであつた。

冬の帰省であつたので、外套を

もつて帰つたが、それを着ると少年の私には引きずる様に長いので、きつちりと折畳み、左腕に掛けて小田原駅から家まで歩いていった。

お堀端通りを背筋をびんと伸ばし、顎を引き前方を直視して正常歩で歩いて帰つていったのが印象に残っている。

みつともない格好だけはしたくなかつたのである。

脇目をしながら歩いたのでは格好が悪く、その上小田原広しといえども同期生は、新山という小学校の同期生と私の二人だけであつた。

そして、陸軍の少年飛行兵は海軍の予科練と異なり、珍しい存在であつた。軍事色の濃い時代ではあつたが、その服装を目の当たりにするのは初めての人が多かつた筈である。

その帰省のとき、田舎の御殿場に軍服で挨拶にいったが、正芳伯父さんには大変喜ばれた記憶がある。

家では兄重忠が私の軍帽をもの珍しくいじくりまわしていたの思い出される。

とにかく帰省の七日間はあつという間であつた。

後髪を引かれる思いで軍隊へ帰つていった。

このようにして昭和十八年は過ぎ去つたのである。

寒さに耐えて

少年飛行兵学校の中隊の前は堂庭

となっていて、その向こう側には飛行機の破損したものが並べられていた。

九九軽爆、呑竜どんりゅうや波板アルミニウムで胴体、翼が覆われた名前も知らない古い飛行機があつた。

九七重爆の次に出来た新鋭の呑竜は兵営の北側の練兵場に春不時着したものだといふ先輩の話であつた。

重爆撃機にもかかわらず、胴体の中は狭く、中央の爆弾倉の所などは腰をまげて通るのにやつとの状態であつた。

毎日が忙しいので飛行機の所まで行き、機体に手を触れてみる機会は少なかつたが、卒業すれば飛行機が待っているんだという思いに駆られていた。

毎月八日の起床は三十分早く、点呼までの時間は舎前舎後や舎内の大掃除をやらされた。冬の三十分早い起床は未だ外は暗く、眠い上に寒さが身にしみた。

軍衣と軍袴の下には儒袴と袴一枚だけで、どんなに寒くてもそれ以上に着るものは無かつた。

管内にも火の気は全然無く、今考えてみると中学三年生の年齢でよく過ごせたものだと思う。手袋も許されていなかったのが冬の最中の「気を付け」は死ぬ思いであつた。

(続)

明治の書簡でつづる

相田軍曹と日清戦争(五)

無残、澎湖島の戦い

瀬戸長治

帰省申請書

(宛名)

《ハガキ》

東京麻布龍土歩兵第三聯隊
後備歩兵第一聯隊第八中隊
相田代吉殿

(差出人)

足柄下郡
早川村外四ヶ邨組合役場
明治廿七年十二月十八日

(宛名)

東京麻布歩兵第三聯隊内
後備歩兵第一聯隊第八中隊
相田代吉殿

(差出人)

相模国足柄下郡
早川村七百六十六番地
佐藤 実英

海蔵寺住職の賀状

はじめに

「相田家文書」について「相田家系略圖
☆弥生館から浦賀へ」

弥生館に復讐(相田代吉より弟相田磯吉あて) 明治27年9月1日

無事入隊を祝し(磯吉より代吉あて)

(以上一七五号)

面会に参るべく(磯吉より代吉あて)

9月5日

馬車鉄道で無事帰省(磯吉より代吉あて)

9月6日

浦賀町駐留の兄へ(磯吉より)

9月10日

駐留地移転の連絡(代吉より相田本家あて)

9月20日

慰問品の発送の知らせ

(以上一七六号)

(石田弥五平より代吉あて)

9月28日

鈴木善左衛門の慰問文(相田代吉あて)

10月2日

駐留宅への札状

(以上一七七号)

(兄に代わって磯吉より三浦郡へ石井文英あて)

9月29日

帰省用洋服持参の依頼(磯吉より代吉あて)

9月29日

☆東京麻布第三聯隊

(東京)見物において(代吉より妻あて)

11月4日

留守宅への指示(代吉より妻あて)

11月26日

前村長の死去

12月20日

(麻府川)麻井長十郎より代吉あて

12月20日

帰省申請書

「早川村外四ヶ邨組合役場より代吉あて」

海蔵寺住職の賀状(代吉あて) 明治28年1月2日

(以上本号)

国府津停車場で面会を

12月18日

(早川村杉崎五衛門・林為より代吉あて)

1月30日

面会後、家族無事帰省(磯吉より代吉あて)

2月5日

七日十時の面会について

2月5日

(石田弥五平より代吉あて)

2月5日

☆広島から澎湖島へ

出征の連絡(代吉より妻あて)

2月13日

話によれば台湾へ(代吉より妻あて)

2月23日

乗船を前に(代吉より相田両家あて)

3月5日

馬関(下関)港にて(代吉より相田本家あて)

3月5日

澎湖島の戦い(代吉より相田本家あて)

3月14日

海軍の参戦(代吉より磯吉あて)

3月14日

敵軍に近接(代吉より磯吉あて)

3月21日

熱病に犯されて

(第八中隊部下一同より磯吉あて)

4月14日

お梅やみ(米料理石政吉より代吉妻へ)

4月30日

第八中隊長からの書簡(相田代吉家族あて)

5月1日

表彰状(足柄下郡兵事報労会呈)

9月26日

従軍記章の証(貧賤局総裁)

11月18日

(文面)

過般、村長ヨリ貴殿現任中の帳簿上ニ対シ、直接、指示相受けたきかど散見候ニつき、当村長ヨリ帰省申請書さし出し候処、お聞き届け相ならず候ニ就キテハ、年末ニ際し後任者ニおいテモ差支へ候ニつき、本月廿二、三日頃ニ、後任者帳簿携帯さし出し候条、然るべくご指示相なりたく、此旨ご通知に及び参らせ候也

(文面)

鳳歴之祥瑞万福尽きず
夫惟(それおもうに)

吾ガ親愛タル閣下、益々ご清適ご超歳あらせられ、恭賀奉り候。降つて小弟、無異加年仕り候間、ご休神下さるべく候。のぶれハ分袂後再三のご通信ナルモ、小弟ヨリ一度モ伺状呈送セズ申し訳これなく、実ハ小弟始終他出、月ニ壹式回見廻リニ帰山、その津(都)度毎々留守居ノ者ニ、閣下ノ安否ヲ聴ケハ、何日(何時)モご健全ノ由申シ答候ヘハ、只安心仕り候故、思ひながら不実ニ流れ候間、ご海容ヲ請フ。

*代吉は入営前、組合役場の収入役の職にあった。

*東京麻布龍土第三聯隊は、現六本木あたりにあった。

次ニ、今ヤ軍人ハ何レモ互ニ、一ニハ国家ノ為、一ニハ名譽ノ為トテ、

先ヲ競フテ外征出陣ヲ望ミ候。時ニ閣下ハ、一ニハ後進策勵ノ為、東都ニあらせられ、定テご遺憾ナラン。然レトモ、外征出陣シテ敵ヲ殺シ城ヲ陥入ル、功名、内国ニ在リテ国家ヲ保護シ、後進ヲ提擧(教導)スル功名、其ノ功同一ニシテ、優劣アルモノニ非ズ。コレ小弟ガ喋々ヲまタズシテ、閣下ノよくご承ノ通りニ候。果シテ然ラバ、母親モアリ、細君、子息モアル閣下ハ、一個ノ名譽ヲ博スルヨリモ、東都ニ在リテ、母上並細君、子息ニ安心ヲ与ヘナガラ

ラ全キノ策ナラン。コレ小弟平素祈禱シテ止マザル処ニござ候。又、望ラクハ、一日モ早くご帰省アリテ、拙寺ヲ保護アラン事ヲ。その他、申上げたきこと沢山アルモ、一朝ノ筆紙ノ尽ス処ニ非ザレバ永春ノ時ニ譲ル。先ハ年賀ノ祝詞旁閣下ノ健全ヲ慶賀ス。

明治二十八年一月二日
相田代吉君 大閣下
佐藤実英 拝

住所である。

(つづく)

露国・日露の役俘虜のこと(17)

八十七年ぶりのお礼 後編(11)

内田善作記
吉田雪子編 「日露戦役従軍記録書簡往来」

五 奉天会戦

重傷を負いハルピンの赤十字病院に入院す。

明治三十八年三月九日〜十五日

三月九日、田義屯東南方畑地に於いて戦闘す。その状況は九日早朝より田義屯の村落より散兵となりて前進す。最前線の戦闘体形はより先、第三連隊、第二連隊、野戦第一連隊は前々日より攻撃し居るも敵は優勢なるを以て占領する能わざるを以て我が後備第一旅団第一連隊の後備三個連隊は此の援兵として前進するに至る。然れども、味方は前々日よりの戦闘の為、砲兵は全滅の姿。機関砲は又弾薬の欠乏を来したるにて少しも発砲せず。只々歩兵のみを以て前進するの止むなきに至る。

歩兵は身を隠蔽する壕とてなく前進するのみなれば、歩兵も非常な損害を来し、漸くにして前日より抵抗し居たる第三、二、一連隊の天然の壕まで到達することを得たり。而し

お
隠岐威重

て其の位置に停止する事三、四時間敵は益々砲撃を重ね其の位置において死傷者続出し、その状明記すべからざるなり。

既にして後備第一旅団は其の位置より前進の命令あり、直ちに奮進し進む事五、六百メートルの処、將に敵壘に突入せんとする際、敵は優勢なる兵力を以て押し寄せ来るを以て、到底衆寡敵せずるを知り退却するの止むを得ざる場合となりたり。

その時、我は右膝関節と、頸より背に二ヶ所の傷を被るに至る。然れども、退却の命令故及ばずながら退却をしつつ来たつて、途中において又左膝関節に負傷を被たり。故に以て少しも歩むこと能わず。残念ながら手に持ちたる銃と腰に帯びたる弾薬盒をとり棄て匍匐にて退却を続けしも、到底及ぶ処にあらざり。

遂に残念にも敵手に収容せらるるの不幸に陥りたり。然れども敵は、我の両足に負傷し居りたりを了解したるものと見え、其の場に打ち棄てて立ち去りた。

とにかく両足負傷せしを以て、痛み強く歩む能わず。其の場に倒れ居たり。たちまちにして敵は突撃し来り、当に我を殺さんとするも幸か不幸か露將校之を止めさせたる為、兵は皆その儘にして前進す。

暫らくして敵は退却し来り我を馬に乗せ連れ行かんとしたれ共、我は夜に至れば逃走せんと思いて馬に乗らずに、夜に至りし故、逃走せんと膝に背負袋を巻き五・六回進みたれど、寒さは強く身に感じ、痛みは増し何分耐え難く、且つ味方に至るには半里もあれば覚束なし。故に以て吾は夜中に至れば如何に方法を設け味方に到着せんとし、且つ味方より衛生隊の来る事を待ち構えたるに、豈図らん、敵の乗馬歩兵らしき者二騎來たりて吾に乗馬せよと言うものの如し。

徹夜すれば凍傷に身を失うも残念と思ひ是非なし。故を以て敵兵二名は吾を抱きかかえ乗馬せしめたり。その時負傷の箇所痛みは想像するに余りあり。

愈々三月九日夜十時頃、敵の為捕虜となる。

註 奉天会戦は三月二日より十日までであるから善作氏は戦闘の最終日に負傷した事になる。

其の夜、奉天より北、次の停車場にて仮包帯所にて仮包帯をなし、早速汽車に乗ると言えども発車せず待ち居りに、我が第一連隊の負傷者も沢山乗車し居るを見る。戦談する事

一、二時間、深更に至りて漸く発車す。

然れども鉄道は単線のこと故、停車場にて停車する事長く、実に負傷の身の上、且つ又貨車の事故困難を感ず。各停車場にて停車中見れば、露兵の貨車には沢山なる荷物を搭載し、又弾薬車、大砲、種々様々なる物をハルピン方向に運ぶを見れば、退却の準備なるや否やと思いつつ、三月十五日午後四時半頃漸くハルピン停車場付近にある赤十字病院に入院す。途中担架にて来る。たまたま一婦人に会す。吾は露国語を知らずと雖も婦人より談話す。その婦人は何と思ひけん、吾に五十銭を与えたり。暫らく同行し来たりしも途中にて訣別したり。その婦人には大いに感じたり。

ハルピン病院に入院するや、準備能く調い居り旧衣を脱ぎ、虱に眠りを襲われる事もなし。傷は痛めども能く眠り恰も内地に帰りたる心持せり。

六 行方不明

国元では善作の音信が絶えたので心配し始めて居た。

一方未だ無事で勇躍して戦線に加わっていると手紙を出している親戚もあり、その手紙が付箋つきで返されて来た。内田家は暗い霧に覆われた。

国府津、奥津壯太郎氏より：
内田 重兵衛様……(葉書)

拝啓 昨日は参上仕り様々ご馳走に相成り有り難く御礼申し上げ候。帰って前川の椎野長五郎様へ愚父参上いたし候処、同家にも未だ何の通知之無き趣に御座候に付、悪しからず御了承下され度、先ずは御礼旁々御報告まで。

岩下清之助氏より

内田善作殿(戦地への便り)

北風凜烈、殺気凛々の折から、御貴君益々御勇勝に壮快候段大賀の至りに存じ候。

小生出征中、君を一度お尋ね面会申す事を樂しみに致し候。実は君が旅順背面御来着の頃より左閃節炎に罷り歩行自由ならず、為にお尋ね致し得ず、実に遺憾之上もなき事に存じ候。小生、目下帰郷療養中には之有候へ共、何れ快復再び出征の機を得御面会仕らんと思想致し居り候。戦いも前途遼遠、御自愛以て國家の為御尽瘁あらん事を希う。

三月十六日 早々
内田 善作殿

善作同様旅順攻撃に参加していた岩下清之助、善作の便りの文中、彼と戦地での面会を熱望していたが、叶わず、清之助は、戦地で膝関節炎のため病氣除隊内地帰還の様様。彼が

善作に送った便りが付箋つきで返され、善作行方不明を裏付ける事は何かの縁か。次記の片野よし子の便りにも不明が匂わされている。

(封書)

久々御無沙汰致し候処、如何居らせ候や。日々心配致し居り候へ共、近頃無人にて、忙しきため、心のみにてつい御伺い申し上げず事、平に御許し下され度候。数度の激戦にも御別状之無く益々御服勤遊ばされ候御事何より嬉しく御祝い申し上げ候。承ればこの度は古今未曾有の大激戦に亘りし由、御苦戦の程思い遣られ感涙にむせび候。就いては御地よりの御書面甚だしく遅れ候ほどに此方皆々様一方ならず心配致し早く御報に接したきと毎日待ち居り候。猶、書き添え候。兄上儀、入院後は日増しに全快に赴き候間御安心下され度、未だ寒氣消えやらす候間、折角御身御大切に御願わしう、凱旋の期を待ち居り候。 かしこ
三月二十八日 よし子

内田 殿

戦友から第一報…善作氏行方不明。
(封書) 椎野莊之助氏より…
内田 重兵衛様

第一旅団後備歩兵第二連隊 第四中隊第一小隊第二分隊 拝啓 陳者、その後は御ぶ音に打ち過ぎ平に御容赦くだされ度候。就

いては貴家の善作殿儀、本月二日一等卒に上進致され候に付、一寸御通知申し上げ候。さて、去る九日の午前七時より奉天北方一里半の所に田義屯と申す村之有り、この村より○村落を攻撃の際、わが連隊は全滅と相成りし処、貴家の善作殿には御氣の毒にも負傷なるや又は捕虜かは判然せざれども只今中隊を取り調べ候処行方不明に相成り候に付、誠に御氣の毒の事には候へ共、一寸御通知申し上げ候。次に我が分隊は十八名の処、健全者は私一名に之有り、他は死傷又は行方不明に御座候。先ずは御通知、余は後便。

三月十九日

早々 椎野 莊之助

内田 重兵衛殿
(この手紙は小田原局へ三十八年四月一日に着)

高橋源三郎氏より
大阪兵站病院にて (葉書)

拝啓 小生儀は貴家若主人善作君と同中隊、同分隊に罷在り候。九日奉天方面の総攻撃の際、我が連隊は三台子停車場攻撃の任に当たり同人と共に前進の際負傷仕り候。貴若主人は御通知に相成りたるや、小生儀は兩三日中に東京病院に後送に相成り候。然らば委細東京成る藤井様に御照介申し上ぐ可く。小生も病室定まり候間。 要用のみ。

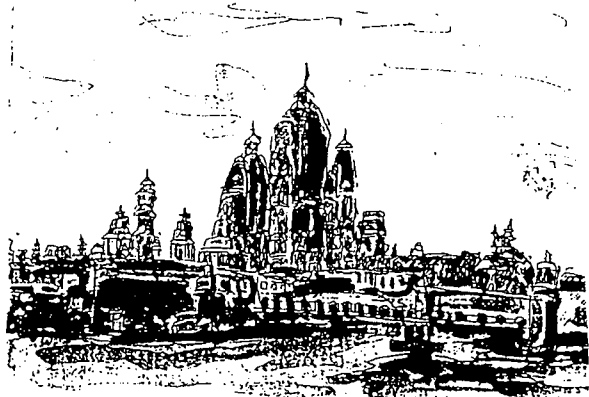
四月六日

小田原に四月八日着

高橋源三郎氏より…神奈川県足柄下郡小田原町十字二…
内田善作殿
東京予備病院渋谷分院第十七号室にて (葉書)

拝呈、さて、内田氏の次第を我が中隊の同院在院者に相尋ねたるに何れもその安否は確かならざるとも、其の死体を発見せざるに於いては決して戦死にあらずして、十中八・九は敵の捕虜となりたるものに存じ候。先ずは御通知まで。

早々 (続)



酒匂史談 ①

川瀬 速雄

はじめに

誰しも我が家の生い立ちや生まれ育った郷土に、興味をもち関心を寄せるのは人情の常であろう。

私の家は、安永年間(一七五〇〜八)、酒匂の川瀬一族より分家し、私で九代目となる。子供の頃より家伝の脇差、印籠など古道具を玩具にして叱られて育ち、祖父や父、村の古老の話を聞き、村の移り変わりを見て、いつしか歴史好きとなっていた。

春秋に富んだ年代には、大東亜戦争、終戦後の混乱そして生活難に出会い、やがて高度成長期に入ると、職務の多忙に身辺を顧みる暇もなかった。ようやく生活も安定した中高年の昭和四十年代に入り一息つなぐようになったが、気が付けば周囲の様相は一変していた。田畑は埋め立てられ家が建ち並び、新しい道路が出来、小川や道路は整備され、由緒ある大木は切り倒され、各家々で祀っていた稲荷様も半減していた。

そんな時、高田の郷土史家内田盛雄君と知り合い、歴史への興味が甦り、以来、酒匂に関係ある史実を、ことあるごとにメモしてきた。

私も老人の仲間になったのか、近年になり町の沿革をよく聞かれ、町の事跡を纏めてはと勧められ、浅学

を顧みず「町の語り部」になれば幸と、『小田原市史』、『小田原

史談』、先輩郷土史家の所蔵される古文書や諸記事を借用し、祖父や父、古老の談話を纏め、「史談酒匂」を起稿してみた。(平成十一年五月)

一 風土

私達の郷土酒匂は、日本列島のほぼ中央に位置する足柄平野南端の海辺と、足柄平野の母なる河、酒匂川河口東部の平坦地にある。

今より約一万年前第四氷河期が終り地球がだんだん暖くなり約五千年前は、地球の最温暖期で今より気温が十度も高かった。地球全体の温度が昇れば南極北極の水も溶けて海面も上昇する。この頃の海辺は今の海岸線より百メートル程高所であったと云う。

筆者は、足柄平野を取巻く山地を探訪し貝類等の化石の出土層を確認して来た。その標高はいずれも百メートル〜七十メートルの高所の沢であった。東方面より列記すれば、

- ①小田原市沼代(曾我山六本松下方の沢)
- ② 〃 曾我剣沢
- ③ 〃 大沢
- ④山北町尺里沢
- ⑤南足柄市蛤沢
- ⑥ 〃 夕日滝下方の沢

これ等いずれも足柄平野を取巻く

等高線上に当たり、粘土又は粘土砂の中に貝その他が埋もれて固まった泥土石である。

約五千年前は、この地線が海岸線で、足柄平野は海底ということになる。これより、又寒冷期に入り小さな暖寒を繰り返しつつ約二千五百年前より大体今の海岸線に落ち付いたという。

しかし、伊豆ノ箱根ノ丹沢を結ぶ地層は、日本列島地層と太平洋地層の接合点とかで、昔より有数の地震地帯で太古より幾度も天変地変を経て今日に至ったと云う。国府津ノ松田断層などその一例である。

酒匂平野は、幾度かの地殻変動により隆起陥没を繰り返した時は丘に、また、ある時は湖沼底になった(曾我病院附近の発掘調査報告による三重遺構はその良き一例と云える)。

私は酒匂部落の土木工事現場で、この頃に関係あるもののような魚の如き模様の入った石一個と骨の化石片一個を採集した。また、私が工事監督をしていたとき八十米程試掘した地層図と合わせ考えるとき、堆積と陥没を繰り返しを重ねて現在に至った事は間違いない。

1 酒匂地層

酒匂の大蔵省印刷局工場構内(酒匂町字東長耕地と中道東、石領の字境地点)を製紙に必要な水を得るため八〇メートルの井戸を掘った。その時の地層図を見ると、粘土砂層(貝化

石の出土する層と類似している)、粘土層(黒いヘドロ状の固まりで芦などが腐蝕した炭化物や高師小僧が含まれている)、砂利層、玉石層、これ等の互層である。この層の変化が天変地変の年輪ではなかるうか。(地層図参照)

なほ、同じ目的では、桑原の富士見橋下流の桑原市菅住宅附近の酒匂川河畔の地層図と対比されたい。

2 模様石

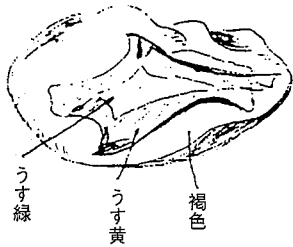
昭和四十六年三月、大蔵省印刷局の宿舍建築工事現場(字十二天)にて一個の石を採集した。この石は大きさ十五センチ×厚さ四センチの褐色の泥土石で中央部に魚のような緑色の模様が入っている。

思うに褐色の粘土に魚が附着し押形を作りこの跡に緑色の粘土が充填して出来た石ではなかるうか。

この地区地下二・五メートルまで赤土でそれ以下粘土層で、地下約四メートルの地点より出土した。地下八十センチより下方には石、岩等皆無でこの模様石一個と約十メートル下方より少量の砂利が混じっていた。(附図参照)

3 骨化石

昭和四十七年六月私の家の裏(字北中宿)の道路の排水工事現場で一個の骨化石を採集した。この骨片長さ三センチ径二・五センチ×二センチのほぼ四角形にて中に「ハス」の穴の如く六条の穴が明いている。穴



模倣石



骨化石



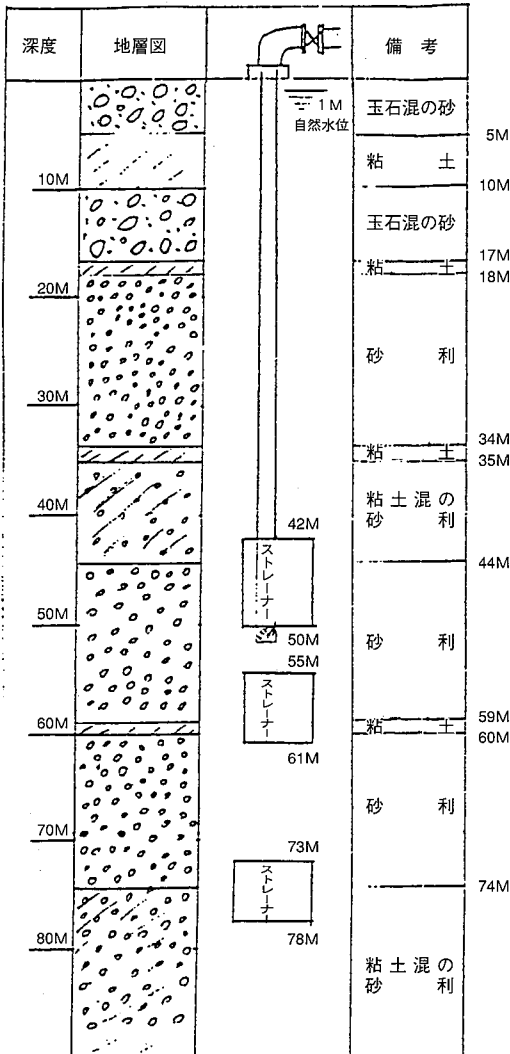
氣候は一年を通じて極めて温暖で、最高三十五度、最低零下五度程度で、十年に一、二回、四、五センチの雪が降る位で、雨量も年間一、五〇〇〜二、〇〇〇ミリ程度。台風の接近も年に一度有るか無きかで、時たま特種な箱根おろしの西風が吹くが、人が住むには、日本一住み心地のよい処と云へよう。

(続)

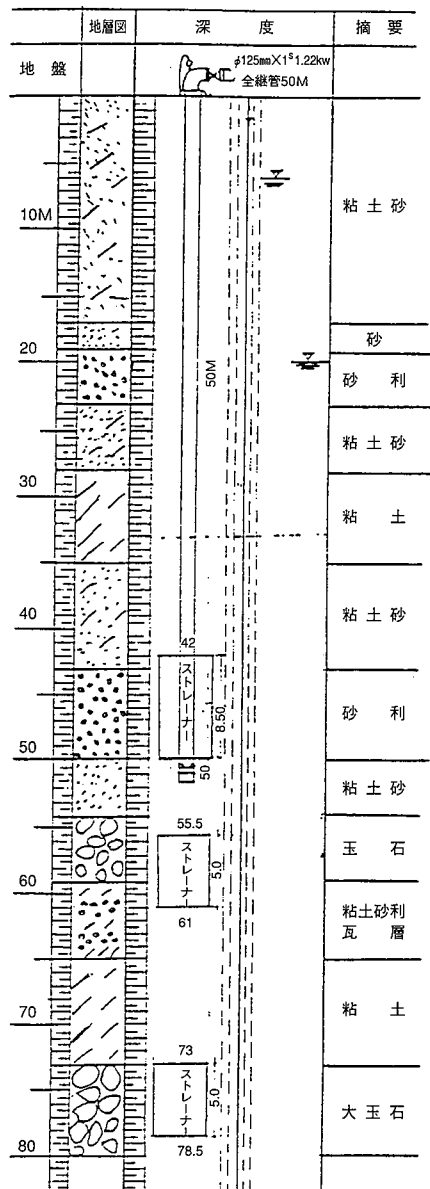
4 氣候

この地区は一・八メートルまで赤土でそれ以下は粘土砂層で地下約三メートルの地点より出土した。この地区も約八十センチより下方は石、岩等皆無でこの骨化石一個のみ出土した。他に類似品及び関連ありそうな物の発見に務めたがそれらしいものは発見出来なかった。

桑原取水場鑿井地層図 昭和43年



鑿井地層断面図 昭和46年



附图1 酒匂地層図

小田原の富士信仰

小林謙光

はじめに

足柄のふじ道と富士講

一 丸東講

(一) 丸東講のおこり

(二) 丸東講の分布 (以上一七二一号)

(三) 丸東講の先達

(四) 小田原市の丸東講

(五) 足柄下郡箱根町の丸東講 (以上一七二二号)

二 丸岩講

(一) 丸岩講のおこり、(二) 丸岩講の組織、

(三) 丸岩講の先達、 (以上一七四号)

(四) 小田原市の丸岩講

三 東 講

(一) 東講の系譜と分布 (以上一七五号)

(二) 小田原市の東講(以上二七六・二七七)

(三) 東講について(考察)(以上一七七)

四 その他の講

(一) 丸花講、(二) 丸嶽講、(三) 丸藤講、(四) 丸

福講、(五) 小田原竹の花の講、(六) 足柄郡檀中、(七) その他、 (以上一七八号) むすび

むすび

小田原市内の富士講関係石造物は四十九基で、他地域に建立されている小田原の富士講関係石造物を含めると五十六基存在する。講社は丸東講、丸岩講、東講、丸花講、丸嶽講、丸藤講、丸福講、その他である。

丸東講は富士吉田より文化・文政年間(南足柄市狩野及び福泉に伝わった講で、足柄地方で最も古い石造物は狩野の弁財寺にある文政二年の碑である。小田原市には六基の碑があるが殆どが明治時代のものである。講は狩野を中心に足柄路沿い及び甲州路小田原方面に広がりを見せ

ている。小田原市多古、早川、石橋、

富士山祭祀碑

(文化九年、小船白髪神社境内) 富士山祭祀の形態をそのまま彫り付けてある珍しい碑

丸岩講は武州岩槻、春日部に起こり、山北町岸を中心に東部に伝

えられた講で、足柄地方で最も古い石造物は中井町半分形にある文政三年の富士浅間大菩薩碑である。小田原市には碑が十四基あり、最も古い碑は上曾我にある安政七年建立の浅間大神碑である。講は小田原市栢山、堀之内、飯田岡、桑原、成田、西大友、下大井、下堀及び曾我山東麓沼代、明沢、小船地域に発展し、安政五年に岸に定住した大先達富士玉座の影響を強く受けた。

東講は江戸の入谷東講(先達山本善光)より伝わった講で、足柄地方では小田原市のみに存在し、上曾我地区を中心に広まったと考えられ田島、千代、永塚、中里、下大井、飯泉地域に講があった。最も古い石造物は曾我谷津大光院にある文政十一年建立の供養塔である。修験宗の大光院には東講の資料が現存しており、富士講と修験宗との関わりがあったことを物語っている。飯泉の夏目家の資料は当時の講の組織、講の範囲、登拝について知ることが出来る数少ない資料である。

なお、山口家の「御藤山於烏帽子岩三十一日之内御伝」は、現在発見されている足柄地方の富士講関係文書の中では最も古い文書であるが東講のものではないと考えられる。

丸花講は江戸本郷に起こった講で、足柄地方では小田原市栢山、堀之内、飯田岡地域に安政年間から明治初期にかけて存在した。最も古い石造物は栢山薬師堂にある安政七年

建立の富士浅間大菩薩碑である。講は明治初期で消滅したものと推定され、その後堂地域には丸岩講が栄えた。

丸嶽講は小田原市曾比に存在した講で大先達申山嶽行(銀持儀右工門)、先達小林治郎左工門の登山三十三度碑(文久三年建立)が須走浅間神社境内にある。曾比の稲荷神社に元治元年、明治五年の講碑があるが文書などが発見されず不明な点が多い。

小田原代官町には天保年間に丸福講が存在し、大先達松島十兵衛(福行)が福浦の露木磯次郎を指導したことが露木家文書によって知ることが出来る。

小田原竹花町には明和五年当時講が存在していたことが須走浅間神社境内の燈籠によって判るが、燈籠に刻まれている人名を追跡したが不明であった。足柄地方における最も古い石造物であるので、何とか手掛かりを得たいものである。

村上藤丸講は明治二十年代に開成町金井島加藤平左衛門(行名名山寿行)によって創設された講で金井島、岡野、延沢、山北町岸、湯坂、日向地域に発展し、小田原市にも同講の北辰妙見星碑が散見される。北辰妙見星碑は平左衛門による星辰信仰と富士信仰を習合した厄除けのための個人祭祀碑である。

その他丸藤講などの碑もみられた。

本稿執筆に当たり資料に目を通す



機会を与えていただいた村山健三、大光院神保行恵院主、川口春雄、夏目恒、山口卓各氏並びに調査にご協力いただいた市川輝雄氏に厚くお礼申しあげます。

本稿の丸東講、丸岩講、村上藤丸講については、既発表の報文と重複を避けるため小田原市に関連する部分の掲載に止めた。詳細については参考文献を参照されたい。

「富士講の歴史」岩科小一郎 昭和五十八年
 「富士講と富士塚」日本常民文化研究所 昭和五十四年
 「足柄の富士講」小林謙光「足柄の文化」No.22、24、25所収 平成七、九、一〇年
 「南足柄の富士信仰」小林謙光「史談足柄」No.35所収 平成九年
 「秦野の富士信仰」小林謙光「秦野研究」No.17所収 平成九年

小田原市富士講関係石造物一覽表

名称	寸法	年代	場所	備考
1 富士山大神	一九二	明治三年	荻窪 市方神社	丸東講
2 富士山	一七七	明治五年	山王 山王神社	全
3 富士浅間大神	一七一	明治六年	早川 紀伊神社	全
4 浅間大神	一七一	明治五年	根府川 寺山神社	全
5 富士登山三十三度	九五	昭和二年	江ノ浦 大美和神社	全
6 富士浅間大神	一八三	明治六年	風祭 八幡神社	全
7 浅間大神	一二九	明治二〇年	宮城野 諏訪神社	全
8 角行靈神	八三	明治三年	全	全
9 食行靈神	八八	明治三年	全	全
10 松本好太郎碑	一五六	昭和六年	全	全
11 仙元大神	四四	昭和二年	宮城野 松本好家氏宅	全
12 浅間大神	一三三	明治三年	栢山 栢山神社	丸岩講
13 富士山大神	一四一	明治四〇年	飯田岡 飯田神社	全
14 浅間大神	一四三	明治一〇年	桑原 三島神社	全
15 浅間大神	三七	明治二年	桑原 村山健三氏宅	全
16 浅間大神	一六九	明治二年	成田 三島神社	全
17 仙元大菩薩	一五四	明治二年	西大友路傍	全
18 浅間大神	一一八	明治九年	鬼柳 白山神社	全
19 南無仙元大菩薩	一三一	慶応三年	下堀公民館裏	全
20 浅間大神	一一六	安政七年	上曾我 須賀神社	全
21 富士浅間大神	一三一	昭和十七年	酒匂町屋 浅間神社	全
22 浅間大神	一四〇	明治六年	小竹下旧道路傍	全
23 石仏	三八	明治四年	小竹下旧道路傍	下講中
24 浅間塔	一四一	慶応元年	沼代 天王山	丸岩講
25 登嶽五十度	九五	明治四年	全	全
26 日露戦捷記念	一一一	明治三年	全	全
27 供養塔	三〇〇	文政二年	曾我谷津 大光院	東講(助力)
28 浅間大神	八六	明治	全	全(破損)
29 浅間社石祠	六七	全	全 浅間山	全
30 富士浅間大菩薩	八五	安政二年	上曾我 保命神社	全
31 浅間大神	一五八	明治三年	田島 津島神社	全
32 浅間大神	一四五	明治九年	千代台ノ塚	全
33 三十三度	一一二	全	全	全(頭部欠損)
34 浅間大神	一七五	明治三年	中里 八幡社	全
35 三十三度	一一七	明治七年	下大井路傍	全
36 浅間大神	一七一	明治六年	飯泉觀音	全
37 登嶽五十六度	一〇一	明治六年	全	全
38 石祠	六一	全	全	全
39 北辰妙見星	六七	四五	曾比 稻荷神社	村上藤丸講
40 浅間大神	五〇	三五	久野 湯川菊蔵氏宅	全
41 浅間大神	五一	二七	板橋 居神社	全
42 北辰妙見星	四三	二五	中里 八幡神社	全
43 北辰妙見星	五三	三〇	上曾我 白山神社參道	全
44 富士浅間大菩薩	一九〇	安政七年	栢山 薬師堂	丸花講
45 浅間大神木花開耶姫尊	一五五	万延元年	栢山神社	全
46 浅間大神	八七	明治五年	全	全
47 木花開耶姫尊	一七七	万延元年	飯田岡	全
48 歌碑	八三	全	全	全(破損)
49 ◎講中	八三	元治元年	曾比 稻荷神社	丸嶽講
50 浅間大明神	一三五	明治二年	全	全
51 三十三度大願成就	六四	文久三年	須走 浅間神社	全
52 木華佐久夜比賣命	一七二	明治五年	入生田 山神社	丸藤講
53 石燈籠	一九六	明和五年	須走 浅間神社	小田原竹花町
54 富士山祭祀碑	九五	文化九年	小船 白髭神社	
55 浅間大神	一六八	昭和三年	延清	
56 仙元大菩薩	五九	昭和四二年	下宿	

補追

酒匂川

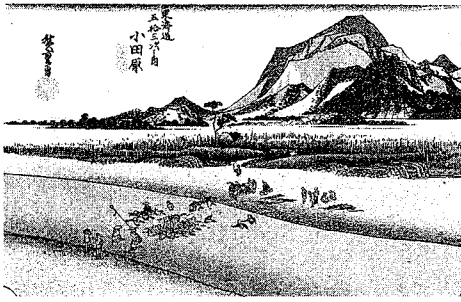
徒歩渡の始まりと仮橋

石井 啓文

前号(『小田原史談』二七号)で、表題についての論考を試みたが、新たな史料が見られたので若干の補追を述べさせて頂く。

渡船から渡渉制への移行は、「遅くても寛文二年(一六六二)には『稲葉日記』から確認でき、同日記に仮橋奉行の見られる慶安元年(一六五〇)以前と言えるのではないだろうか」と、

記・紀行文等から、酒匂川徒渉の様子を調べているのであるが、寛文元年(一六六〇)に浅井了意によって書かれた『東海道名所記』に、「酒匂川、



広重描く「酒匂川の渡し」

富士のすそより流る。常にハ歩渡り。冬は土橋をかけらる。此川、道のかた一町ばかりにして、海に入なり。追はぎおほし、夜ぶかに出べからず」とある。

また、明暦元年(一六五五)刊行の道中記は、「つねにハわたし、御上らくにハふなはし」と、記している。そこで、新たな川越えの記述を加えて幕府の施策とを整理すると、次のようになる。

- ・寛永 十年(一六三三)頃 年貢米輸送のため仮橋架設始まる
- ・寛永十二年(一六三五) 六月 外様大名に参勤交代制の発令
- ・寛永十九年(一六四二) 五月 譜代大名にも参勤交代制の発令
- ・慶安 元年(一六五〇) 十月 仮橋奉行が酒匂川巡回視察
- ・明暦 元年(一六五五)道中記 常にハわたし、御上洛にハ舟橋
- ・万治 二年(一六五九) 七月 道中奉行の設置
- ・寛文 元年(一六六〇)名所記 常ハ歩渡り、冬は土橋を架けらる
- ・寛文 二年(一六六二) 三月 仮橋、最早水毛暖二成候付崩候

・寛文 六年(一六六六) 十月 酒匂仮橋今日より往還之衆相通
・寛文 九年(一六六九) 十一月 酒匂川歩行越賃銭定(稲葉正則)
以上、徒歩渡は寛文元年には確認でき、仮橋奉行が見られる慶安元年から道中記の明暦元年頃は徒渉制であることが窺える。

川に、「冬川之義」が記されている。しかし、『五駆便覧』は次のように記している。
興津川 諸大名交代并武家常往来之分者賃銭請取来申候、冬川仮橋之儀ハ武家・町人共賃銭請取不申候、
酒匂川 諸大名交代并武家常往来之分ハ賃銭受取来申候、且毎年十月より翌三月迄領主より仮橋掛渡往來いたし候節者、武家・町人共無賃二而相通し申候、

また、仮橋架設が『酒匂川旧記』に年貢米輸送のためとあったが、興津川も同様年貢米輸送と言われ、仮橋期間の十月五日から翌年三月五日までが合致している。或いは年貢米輸送は名目で、本来は江戸防備・駿府防備のためではないだろうか。幕府は軍事上の理由を公然と述べる訳にはいかず、年貢米輸送としたことが考えられる。とすれば、参勤交代制発令の二年前、寛永十年頃には徒渉制が発令されていたと言えるのであるが……

興津川では仮橋期間を冬川と称しているが、酒匂川では「十月より翌三月迄」として冬川は用いていない。私は、八十点余の日記・紀行文・道中記等を調べたが、これらの文章には「夏川・冬川」の記述は全く見られない。ということとは、一般には使われなかった言葉であり、現代の法律用語とでも言うべきものである。そして、冬季の仮橋は無賃であったことが知れる。

明暦元年以前の徒歩越の文献を見つけたものである。
また、石碑には「夏川・冬川と称した」とあったが、これも『東海道宿村大概帳』には、
一、右(酒匂)川三月五日より十月五日迄夏川と唱、(後略)
一、右(酒匂)川冬川と相唱へ候儀無之
とあり、夏川と称するが、冬川とは言わないとしている。
ただ、『道中方便書』一八四項酒匂

以上、前号も述べたことであるが、この石碑に刻まれた文章は殆どが調査不足であり、早急に見直されることを期待する。なお、前号川越賃の推移表で、正徳元年の浅水・平水が一〇文(商人七文)とあるのは、三五文(同四文)の校正ミスであり、訂正してお詫び申し上げます。

脱出

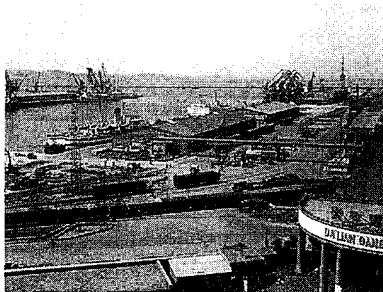
天野 宏

ダダダ 銃声がする。夜のロシヤ波止場は不気味である。船底に身を潜めている我々は今は一刻も早く船が波止場を離れ、大連港の外に出る事を願う気持ちだけである。

この日、昭和二十年（一九四五）十二月十二日、奇しくも私の二十四回目の誕生日、今大連港を離れ故国日本目指しての旅立ちである。吉と出るか、凶と出るか運命の岐れ途となる瞬間が近づいていた。

午後四時旧大連港の船会社の事務所に三々五々集った人の表情は不安と安心感

大連埠頭



の入り混じった気分である。日本に帰れるという安堵感然しどのような船で、又果たして日本に辿りつけるのか、又日本では我々の上陸を受け入れて呉れるのか、という不安があった。

当時大連では、日本では我々の帰国を喜ばず、食糧難で余分の人に食べさせる余裕も無いから帰れと、港で竹槍で追返されるというデマが、まことしやかに伝わっていた。

私がこの船に乗船する事となったのは、会社の事情にある。

八月十五日の敗戦を境として大連の街の様相は急変し、日本人の生活は窮乏のどん底に陥った。ソ聯軍隊の進駐により、日本軍の武装解除について関東州庁、大連市役所は解体され、新しい中国人による市公所が出来、役所の事業は不慣れで停滞し、更に強力なソ聯軍の武力介入の傀儡政權、銀行等金融機関の接収による預金の封鎖となり、経済

活動は停滞し、市民生活も日一日と不安な状態となった。

この事態に加えて私の勤める大日本塩業株式会社では、関東州各地に点在する製塩事業所は中国側に接収されると同時に、日本人は一夜にして居住地から追放される事態となり、社員とその家族は着のみ着のまま

で続々と大連市内に雪崩のように避難してきた。俄かの避難社員は売り食いする家財荷物も無く、為にその生活救助に大連支社では会社の資金を振り向けた。然し金融機関の封鎖でそれも意の儘に出来ず、近くの大連塩田からの塩の売りさばきによる収入をあてにしたが、それも成績上がらず十一月には困窮におちいった。

遂に支社長以下幹部社員は協議の結果、打開策の一つとして東京の本社に貧窮を訴え救済の手を差し延べるよう使者を出す事となった。

当時使者に立てる可能な社員は独身で家族のいない者という事となり私と、当時日本から単身赴任で来ていた内田社員の二人だけで

あった。私は兄夫婦が新京にいたが、私自身は独身でもあり、母や他の家族は日本にいたので一番有力候補の一人であつたらしい。

終戦で奉天から復員して来た私は、招集の七月に下宿を引き払つてあつたので、復員するとすぐ会社の幹部社員の鷺尾英一様の家に内田社員と共に寄宿させて戴いていた。

会社では社命で出す以上その安全を確保する必要から、情報を各方面から集め、遂に港湾運輸の関係から確実な線を得た。それは山下汽船の子会社の船長が二杯の内一杯の船を処分し燃料油を購入し、家族を日本に送り帰すという、それに頼んで便乗させて貰うという案であつた。

船賃一人三千五百円は当時の金の無い大連では非常な大金である。会社の情勢としては絶体絶命の時であつて、「鷺塚君必ず帰つて来てくれよ」という激励であつた。まさに、この船は再び大連港に一箇月後に戻つて来たのである。

出発の前日、鷺尾様の家でささやかな壮行会が開かれた。そこには会社の書類

の外に多くの社員其他の方の手紙が届けられ、日本への託送を頼みに来た人もありました。そこで何故か同行する筈の内田社員は取り止めたのです。

しかし、情況がここまで切迫して誰も行かないでは会社の救済対策にも影響するし、私の帰国を頼りにして日本の父母兄弟親類縁者に宛た悲痛な叫びにも似た数多くの手紙（私のリュックサックにはほぼ一杯の量であつた）、を託された方々の希望を考えると、最早、誰かが、この船に乗船し、日本に向うしかないと考えた。それで私は、席上で鷺尾様や西様に冗談のように、「若し大連からの引き揚げが始まり、皆様が日本に帰った時に私が到着していない事が判明したら、母に宏は、終戦の年十二月十二日に大連で死んだと伝えてください」と頼んだ。

伴場君が同行したのは、偶然大連市内で彼と会った事からで、彼が三菱関東マダグネシウムに勤務し石河屯の田舎にいたが、会社の接収と同時に追放された社員全員が大連に避難生活している事が解り、独身の彼に

は売り食いすべき物も無いので困っているという話を聞いたからである。彼は決断良く「鵜塚と一緒になら行こう」と決めた。彼の決めの爽やかな事でも私も思い切りよく決断出来た事も事実である。彼は衣類蒲団全てを売り払い三千五百円の船賃を作ったのである。も少し延びていたら到底旅費が出来なかつたであろう。

波止場迄ゾロゾロ歩いて港について乗船する、珍しそうに中国人が眺めていたが、誰も手出しをする者もいなかった。第七栄丸三十八トンのトロール漁船である。魚を入れる船底に二段に棚が出来ているそこに詰め込まれたが、横になって寝ているだけである。入り切れないので男は皆甲板に出てくれという。この寒い時甲板では死んでしまう、伴場君と二人は息を殺して潜っていたら、その騒ぎも納った。唯一つの荷物のリュックサックは甲板でとられて積み上げられてしまったので弁当もない。

深夜、遂に船が出帆した。エンジンの音がこの時程頼もしく聞えた時は無かつた。どうぞこのエンジンの

音よ止ってくれるな、願う気持である。それ迄執拗に続いた保安隊の人調べも終り、一人の旧軍人を強制的に家族から離して下船させて終ったようだ。又銃声、これは機関銃だ、恐らく突堤の先で撃っているのだらう。

船が揺れる。酷い揺れだ。出港の緊張が解けると何時の間にか眠って仕舞つたようだ。周りの人も眠っているようだ。しかし、小さな声で船底から聞こえてくる。子供の声だ。母親らしいなだめ声をする。然し中は真つ暗で、何も見えない。やつと誰かがハッチを開いたらしい。凄いな音がし潮風と飛沫を一語に吹込んだ。外は大荒れだ。

外を見る為にハッチまで出て重い杵を押し上げて覗いて見る。凄いな、山のような波、初めて見た大波である。そしてその峰を越えると船は奈落に落ちこむように波の底に進んで行く。丁度目の前に水の壁が立って見える。「アアッ船が波の中に入込んでしまう。この儘では船体が水の壁に呑み込まれてしまう」

しかし、船底からはエンジンの音が規則正しく聞こえてくる。この時のエンジンの音ほどたくましくかつ力強く感じたことはない。

「進む 進む 波の壁に向かつて進む、その儘突っこめば海の中だぞ 起きろ 船首を挙げる」

何時の間にか船は徐々に高くなつて波の頂上に来てゐる。そして、周囲は雲と波頭だけが見える、波のてっぺんを走っている。そしてまた、波の底に引き込まれるように進んで行くのだ。

木の葉のような小さいこの船、大勢の人の命を託しているこの三十八トンの栄丸よ 力強いエンジンの音 この時ほど、船底から伝わるエンジンの音に励まされたかわからない。

船底の人は殆どが酔いに苦しんでいる。私は全然酔っていないのに気がついた。底板を渡って吐いた物の入った金ダライを引き受けてハッチから外に捨てる仕事を引き受けた。外甲板には何人かの人が集まっているようだが、全然動かない。波が時々船首からザーっとかぶってくる。捨てた汚物

は海が洗い流して呉れる。小さい子供は大小便をするにも親の助けをかりておまるにする。それを外に捨てるのも一仕事だ。

海は静穏になつた。まる三日の経過があつた。一日は完全に時化である。この時船は日本に向わず、旅順の方向に流されていったという。それから漸く荒海が静穏になるのに二日過ぎた、ベタ風というのはこのような事であろう。「鏡の如き黄海は……」という軍歌を想い出した。エンジンの音は心無しか眠たいように聞える。今日は皆元氣になつたようだ。酔いの治つた人もかなりいるようだ。静かな海になつた途端、腹がグーッと鳴る。そうだ弁当だ。しかし、リュックサックは集められて何処かに入ってしまったので探すことも出来ない。船の底から包みを差し出される。「どうかめしあがつて下さい」という。酔いで食事にも喉に通らないらしい。私に汚物を運んで貰つた御礼のようだ。遠慮なく頂戴する。奇麗な重箱に海苔巻き、お煮しめが入っている。これが静穏な航海ならば家族

で楽しく食べたのであろうが、あの荒海では何も食べるものが出来ず船底で元氣の出るのを待っているのみである。

船の上は俄に演芸会場になつた、船首に立つて甲板を見るとハッチは二つあつて我々のハッチは操舵室に近いほうである。海が風いでいるので多勢の人が元氣になつたようである。船員の人元氣に浪花節を始めた。家財道具を処分して日本に引上げる人達であるが、子供達の騒ぐ声も混じつて明るい気分である。やはり異国人の迫害にあつた経験が身に染みて嫌な感じを抱いて来ているのだ。それがやつと彼等の手から開放されたので笑い声も漏れて来るのである。

晴天の中を走っている船の上は案外暑い。水が無くなつてきているらしい。子供が水を欲しがっているのが船員室に貫いにいつたが飲水は少ししかないのが大切なのむのだよという。私達大人は最早水を飲むことは遠慮して我慢することとする。

朝から波も大きくなつ

た。空も雲が速い。速くに雨足が見える「雨だ、雨だ」という。誰も喉が乾いているのだ、船が雲の方に走る、まもなく船は雨雲の下に入ったらしく大粒の雨が降ってきた。雨水を受ける為には皆が工夫をするがうまく方法が無い。船員が船の帆を広げ中央を下に引っ張ると水が溜るので底に穴を開けてその水を飯ごうの中に集める。皆でその水を分けて貰う、然し帆には塩がついているので水は塩辛いのでがっかりする。一口飲むと又飲みたく感じ最後には船端で海の水を汲み飲みたいとおもったりする。

陸地が見える。「あれは九州だ」と誰かが云う。「五島列島だ」という。今日で何日目だろう。五日目である。はるばる来たものだ。美しい日本の島よ緑よ、島がとても奇麗に見える。ああ矢張り日本は美しい国だ。しかし、なかなか船は港に入港の気配がない。誰かが「九州はアメリカ軍の警戒が厳しいから萩港に向かっているのだ」という。遂に夜になった。甲板で荷物を探したらあれほどの雨や波にも拘らず、リュック

サックは濡れずに見付かった。然し、上に縛り着けておいた軍用カッパは誰かが外してしまつて無かつた。きつと甲板にいた人が雨除けに利用したのであろう。

甲板で雨波を凌いで頑張った人に比べれば船底に隠れていた私だからその位は我慢しなければいけないと思つた。リュックが濡れずに中の手紙が無事であれば私の使命の第一段階が無事進行した事である。

船は闇の中を静かに進んでいるようだ。時間も遅い、船は静かに入港する。何処の港に入ったのか不明である。

「唐津です」「入港しました」「手続きしますからちよつとお待ち下さい」次々と上の甲板から声がする。

ああー 着いた、日本に着いた。

外に出て日本の空気を吸つてみる。何かしら甘い味がする。港を見るが倉庫が見えるだけで誰もいない。竹槍で追い返されるといふのはデマだな。警察と消防の人がやって来た、荷車に何か載せている、四斗樽だ、水だ、旨い、甘い、こんなに甘い水を飲んだのは始めてである。暫くすると婦人会の方々が雑炊とおむすびを届けてきたのである。ずっと食事を食べられなかつた我々には有難い事だ。

船が嵐の中を走っている間に三人の方が亡くなつていふという話である。それらの方は唐津で茶毘に付すという。

やがて船から全員が案内されて市内に向かつた、我々は一軒の家に導かれた。そこは病院であつて、その病室にわけられて入つた。

朝になると薩摩芋の入つた食事を頂いてから、引揚証明書を買いに役場の出張所に出頭した。各自が目的地迄の乗車券を買ひ列車に乗り込んだのはその日の夕方であつた。私は船長に会い、再び出港する日を確認してから東京に向かつた。唐津駅からは伴場君と若杉さん母子が一諸である。若杉さんは大連の小波町の人で、出港の時御主人が保安隊に下船させられたので、奥さんの実家の東京に帰ら

れるという。

私が東京丸の内八重洲ビルの大日本塩業株式会社に着いたのは、十九日朝であつた。暫くドアの外で待つていと掃除の方が来た。「どなたですか」と聞くので「大連から来ました」というと「エー」と驚いて私の顔を見ていた。そしてドアを開けて応接間に招じ入れた。暫くすると社員の方が出勤されて来て驚いて挨拶に入つて来た。安東庄司重役が入つて来て漸く大連の話が出来るようになった。島田社長が出てきて私の預かつた書類を渡し話をした。私の勤めは終つた。

外務省に呼ばれたり、満州塩業の関係者に会つたりした。三越本社の重役の方に面会し、大連支店長の井上さん(御息が同じ日塩会社に勤務されていた)の書類を預かつてきていたので、お渡しし大連の状況を説明した。

後日記

会社では各方面と折衝し、大連送金について検討したが「マ司令部の指令により日本から送金出来ないばかりか日本人の国外出国

禁止となつていたので貴君の出国も出来ない。大連には若し船が帰る事が出来るなら手紙を届ける事とした」といふ返事であつた。私は大連にいる皆さんの事を思った。しかし、連合国の占領下にある日本の現状には万止むを得ない事を感じた。唐津港に在る間に、大連で預かつた個人の手紙は返送先に私の実家「神奈川県小田原市池上三十一番地」に大連宛の手紙を送るように書いて郵便局に投函しておいた。

本社の用件が済んだ私には、次には手紙を回収し唐津の船に行き高丘船長に会い手紙を渡し大連に運んで呉れるように頼む事であつた。一月になつて再び唐津港に向かつた私は榮丸の高丘船長に会い手紙の入つた箱を渡しお願いした。

この手紙が無事大連に着いて皆さんに渡す事が出来たのは幸であつた。

〒250-0312

神奈川県足柄下郡箱根町

湯本茶屋十八

天野宏

電話 ☎ ☎ ☎ ☎ ☎ ☎ ☎

FAX ☎ ☎ ☎ ☎ ☎ ☎ ☎

戦後の小田原で

戸塚 日出子

昭和二十年(元翌)年の

秋、私達家族は、復員してきた父と共に、疎開先の掛川から小田原に向かった。

敗戦直後の列車は混雑を極め、窓からもデッキからも人が溢れ出ていた。

列車の通路に新聞紙を敷いて座り込んだ私達は身動きも出来ず、窓から入ってくる乗客に押しつぶされそうな汽車の旅だった。

初めて降りた小田原駅も、復員兵や、大きなリュックを背負った買い出し客でごった返し、あちこちに立つMP(アメリカ軍憲兵)の姿が恐ろしく、不気味だった。

引越し先の家が片づくまで、私達は、しばらくのあいだ新玉の井上さんのお宅にご厄介になった。その年の夏戦災で焼け出された私達には、布団と、僅かな食器と衣類の外は何もない生活だった。でも、あかあかと電燈の点った部屋で、家族全員が揃って生活できることは、何よりもうれし

いことだった。

転校先の新玉国民学校も、校舎の一部が爆撃を受けて痛々しかった。

転校すると間もなく、国語や音楽の本など国定教科書の墨塗りの作業が始まった。音楽の教科書からは、「海ゆかば」「大八州」「橘

中佐」「小楠公」など、軍国主義・超国家主義的な教材が塗りつぶされていった。

この教科書は、私が戦災の中も大切に身につけていたものだった。でも悲しくはなかった。それよりも、隣の教室から響いてきた「冬景色」「船出」などの美しい、明るい歌声に心を躍らせた。

この頃、食料の遅配、欠配は珍しいことではなく、母は、防空壕で焼け残った僅かな着物を持っては買い出しに出掛けていた。学校へお弁当を持って来られる子は数える程で、午前中の授業が終わると、家へ昼食を食べに帰った。すいとん・ふかしいも・雑炊・細切れ

のうどんの煮込み、いも粉で作ったいもだんご……。おからを入れて作ったおだんごは、どうしても喉を通らなかつた。あの頃、子ども達に三食食べさせるのは、どんなに大変だったことだろう。

その頃のことだったろうか。学校でララ物資の缶詰と、野菜や芋類を煮込んだ給食を作ってくれた。今でも、あの頃のみんなのこにこ顔と、給食の温かさ、匂いと味を思い出すことができる。

クラスの人達は、遊び道具なんて一つもない転校生の私を、優しく温かく迎えてくれた。古紙を裏返しにしてノートを作ったり、ぼろ布をさいてつなげては、ゴム跳びもやった。端ぎれでお手玉を作って遊んだり、空き缶に紐を通してその上に乗って遊んだこともあった。

ようやく手に入れたゴムまりはすぐに空気が抜けて、火に焙って温めれば根気よくまりつきもした。スポンジをはり合わせて自分でボールを作ったこともあった。まん丸に作るのは

難しく、ボールはあつちこつちへはね返った。何度も刈り込んでピンポン玉のように小さくなった。

自転車で三角乗りから棒乗りができるようになると、行動半径は増々広くなった。クラスの友達の家で知らない家は、ほとんどなかった。

灯火管制もない、恐ろしいサイレンや、高射砲の音も聞こえない、家や学校を焼かれる心配もない。もう、父を戦争にとられることもない。小田原での生活は、私にとって、戦争から開放され、戦争で失ったものを一気に取り戻す時代でもあったようだ。

六年生の頃だったろうか。毎週土曜日になると、どこからか、アコーディオンを抱えたお兄さんがやってくるようになった。

まだ再開していない青果市場で、そのお兄さんは、「大きな栗の木の下で」など、沢山の歌や歌遊びを教えてくれた。帰りはいつも、お兄さんの弾くアコーディオンに合わせて、みんなで歌いながら家路についていた。川田孝子さんが、新玉小学校の講堂?で童謡を聞か

せてくれたこともあった。「見てごさる」「みかんの花咲く丘」「里の秋」などの童謡がラジオから流れ、鐘の鳴る丘」の放送劇とともに、心を和ませてくれた。

昭和二十二年(元西)年、学制が改まって、私達は新制中学の一年生になった。しかし、新校舎ができる迄、小学校での間借り生活が続いた。

「新日本建設」のかけ声は、大人だけでなく、私達の心にも強く響いた。爆撃を受けた校舎の修復と重なって、これから新しい日本に生まれ変わるといふ期待感でいっぱいだった。

入学式のこと覚えているが、新聞紙を切ったような教科書から、教科書らしい教科書に変わった時は嬉しかった。

その年の五月、新憲法が公布され、「新しい憲法のはなし」という小冊子が配られた。クリーム色の地に国会議事堂の浮かび上がった、当時としては美しい表紙だった。

主権在民・民主主義・基本的人権など、憲法の精神を

読み取ろうと、何度も何度も読み返した。また、「戦争放棄」の解説のページには、巨大な容器に戦闘機や軍艦が捨てられ、それに代わって、ぴかぴかのビルや電車、貿易船が飛び出してくる挿し絵が描かれていて、日本に新しい未来があることを感じさせてくれた。

しかし、現実の生活は甘くはなかった。

ラジオからは「異国の丘」が流れ、肉親を求めての「尋ね人」が絶えることなく続いた。駅頭や街頭に立つ白衣の傷病兵の姿が人目をひいた。

食料不足は相変わらずで、代用食として、豆かす、コーリヤン、アワ、砂糖、ニシン、トウモロコシ粉、ふすまの混じった小麦粉などが配給された。

お菓子職人だったNさんのお父さんに教わりながら、砂糖に酢を入れたおいしい餡を作ったり、トウモロコシ粉でパンを焼いたりした。家族揃ってカルメ焼きを楽しんだりもした。

狭い庭にカボチャの苗を植えたことがあった。つるはずんずん伸びて、屋根にいくつものカボチャが転

がった。

「今度の日曜日あたりには、食べられるかな」みんなで楽しみにしていたカボチャは、日曜日を待たずに、忽然と姿を消した。

「あのカボチャを持っていった人は、おなかを空かしている子に食べさせるものがない。そういう人だったんじゃないかな。お前達には可哀相だったけれど、その家族が飢え死にしないで生き延びてくれたら、と思わないかい」父の言葉が今も耳に残っている。

新しい校舎ができて、引越した日のことは、はつきりと覚えている。新玉小学校から二中までの長い道のりを、机や腰掛を下げて、文句を言わずに、しかも楽しく……。

他に方法はなかったのだから、みんな遅しかった。

昼休みになると、松林に続く海岸に遊びに出た。先生方もいっしょに外に出て海を眺めながらおしゃべりしたり写真を撮っていただいたり、のどかだった。

教科書とノートだけの授業だったけれど、勉強は楽しかった。

どの先生も熱心で温かく、個性的だった。授業中にしてくれる先生の余談は楽しいものだが、ある時松島先生がこんな話をしてくれた。

「日本人の掃除は、溜まった埃を塵払いで舞い上げさせるだけだが、アメリカには『掃除機』というものがあって、モーターで埃を吸い込む合理的な掃除をしている」こと。また、「洗濯も、モーターで水流を作って布目に洗剤液を通して汚れを取る『洗濯機』を使っている」こと。

ほかに、「一軒に一台以上の車を持っている」ことなどを聞いて、国力の差に驚かされたものだった。

テストの結果を一覧表にして廊下に掲示したり、英語の単語テストで合格点をとるまで帰さない、など学校としては策を講じてくれた。余り効果はなかったようだ。

勉強は学校でするもの、と勝手に決めていたから。でも、英語も数学も理科も……。そして、学校も大好きだった。

同級生が、野球や卓球の

試合に出て鎬を削っていたのに、私は何をしていたのだろう。卓球部の人といっしょに卓球もやったし、バドミントンにも夢中になったことがあるけれど、よく思い出せない。

五日制の導入で、ゆつくりとした時間が持てるようになった。その頃仲よかったTさんと、よく山歩きをした。すみれ草、野あざみ、山つつじ、ほたるぶくろなど、初めて見る野の花は、山の緑に映えて美しくかった。

父が手に入れてきた横光利一や漱石の作品もよく読んだ。近所の家の物置にもぐり込んで、昔の少女雑誌や婦人雑誌の小説も夢中で読んだものだった。活字に餓えていたのだろう。新聞小説も毎朝楽しみみだつた。

「あしおと」――戦争から戻って来ない人の足音を待つ――そんな小説も印象に残っている。

男女共学になって三年目、三年生の時には、男子生徒とも楽しい時間が持てた。日さんのお宅に大勢で押しかけて、お母さま手作

りの食事を御馳走になったこともある。担任の大丸先生のお宅にお邪魔したこともあった。先生の妹さんが、ご自分のピアノ伴奏で「四つ葉のクローバー」を歌って下さった。ソプラノの声の美しさと、歌曲そのものの美しさに魅せられた。レコードで外国の映画音楽を聞いたりおしゃべりを楽しんだり、ちよつぱり大人の入口にさしかかった素敵なきときを過ごした。

小田原を離れてから後、電車で小田原駅を通る度に、私はホームに降りて箱根山を見つめ、懐かしい小田原の空気を胸いっぱい吸い込んだものだった。

ふるさとの山はありがたきかなーふるさとの山がありがたく思えるのは、その山のもので、すてきな人達と出会い、心優しく、生き生きと、そして心豊かに過ごすことができたからだと思う。

小田原で過ごしたのは、たった六年間だけだったけれど。

〔昭和二十二年新制中学一年生 白き鴉舞う中学の旅立ち〕より転載

古文書講座 28

六花苑の俳句を読む

内田 清

六花苑と乙児・官鼠・嵐窓

六花苑は雪中庵服部嵐雪の流れをくむ俳諧の一派で、六花は雪の異称である。初代は渋谷六花と大島蓼太に学んだ松木乙児(現静岡市)、二世釈官鼠(現沼津市)、三世円城寺嵐窓(小田原、四世兆斎(小田原)、五世今川桃僊(狩野)、六世矢野蘭径(雨坪)、七世林荷笠(関本)、八世伊東一蓑(塚原)、九世石川梅僊(塚原)と続き、

南足柄市域に定着した。

写真版1は三代の宗匠の富士山を詠んだ句を集めたもので、裏書きによると嵐窓の書である。

初代乙児(七五七三)の句は、不動の富士山に対する人生の感慨を、起上り小法師、別名不倒翁になぞらえた新年の挨拶句であろうか。

二世官鼠(八三三没)の句は、頂にだけ雪の残る五(六)月の富士山を、自分の箱枕に擬して気持ちの大きさを示したものであろうか。

三世嵐窓(七七七二八三)の句は、富士山を不死の山にかけ言葉として、俳諧に精進した人生に悔なしというのである。歴代の句を集めて掛軸にし、六花苑宗匠の伝承品として、宗匠の心掛けを論ずるという意図も窺える掛軸である。

嵐窓は小田原藩士・軍学者範も勤めながら十九世紀初頭の俳壇の隆盛をリードした。

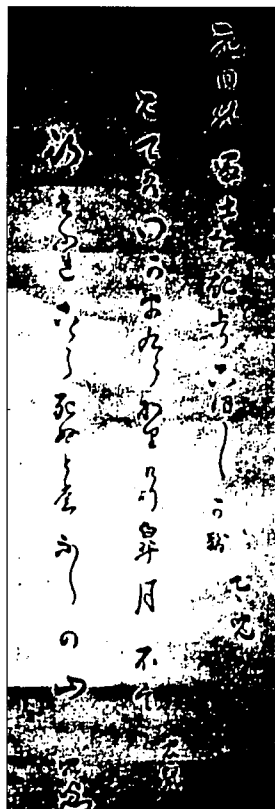
今川桃僊の杉本田蔵追悼句

五世桃僊(八三三三)は、狩野村臨済宗極楽寺の住職だった。

写真版2は文久元年(一八六一)十一

其夜帰里て

月



極楽寺蔵

月

に五十九歳で亡くなった杉本田蔵の霊前へ追悼の三句を呈した料紙の最初の部分である。桃僊は「僧職と俗人との隔て」を前文で記しているが菩提寺関係にはない。また田蔵保穀が親に当たるとは年長であり、しかも二宮尊徳の直弟子・中沼村名主として高名な人物であるのに「友千鳥」と同列で詠んでいる。よほど親しい関係に在ったのであろうか。

残の二句は、

保穀居士乃野辺を見送り亭

骨身尔も志み込ほと乃しく連可那

其夜帰里て

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

保穀居士乃野辺を見送り亭

骨身尔も志み込ほと乃しく連可那

其夜帰里て

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

杉本晃氏蔵

元日能 富士を起上り 古ほし可難 乙児

者て盤ワ可 末九ら加里介利 皐月不尽 官鼠

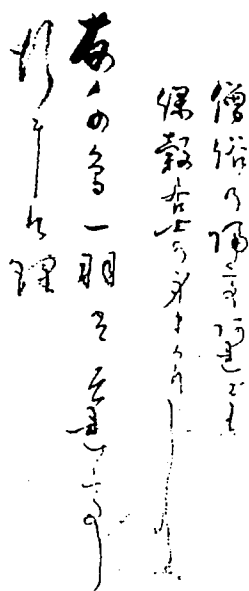
行堂ふ連 古、耳死ぬと裳 ふしの山 嵐窓

僧俗乃隔亭阿連ども

保穀居士乃身ま可利し尔

友千鳥一羽盤春連亭

行耳介理



杉本晃氏蔵

埋火乃消天寝ら連怒夜奈り氣利

なお「五木軒桃僊」の署名がある
ので、桃僊は、四世兆斎から立机免
許を受けて二年後のこの時、まだ五
世六花苑を継承していなかった事が
わかる。したがって桃僊の六花苑時
代は拾年に満たず、四十二歳で遷化
したのに、高名を残したのである。

林荷笠と石川梅僊の句

七世荷笠(一八三〇—一九〇二)は、三十
三歳からへボンに医を学び五十六歳
で帰郷して天真堂医院を開業した。
六花苑宗匠は七年間ほどだったが没
後三十年して句碑が立てられた。

立安幾乃志越李見衣介離西農楚良

写真版3



内田清 採拓

表面は遺墨を移したもののだが、前
記のように殆ど変体仮名である。荷
笠の字義「はすの葉笠」を表題とし
た追善句集も編まれた。

九世梅僊(一八〇一—一八五〇)は昭和二年
(一九三三)に六花苑襲名式会を行い、
先師一蓑・荷笠の句碑を立て、岡本
村村長を三期勤めた。写真版3の句
碑は笹子地藏参道の高所にある為
か、「笹子路(嶺)」「雲の切(晴)れ間」
などと誤読されていたが、稲作農民
の高い教養を示した秀作である。

注意してほしい語句

俳句・短歌などは、変体仮名に慣
れ、文学的教養を積まないと解説・
解釈出来ない。墨痕と虫孔など写真・

拓本・史料の疑問点は再確認の労を
惜しんではいけない。

A かな 乙児

かな、おつじ かなは哉・可那・可
南・可難・佳那・佳奈など様々に書
かれる。この場合、崩しにやや難点
は有るが元字は「難」だろう。乙児
は写真で「乙与児」にも見えたので
軸を確認したが虫孔だった。「いつ
じ」と読む本もあるが高木蒼梧著『俳
諧人名辞典』によった。

B 盤春連亭

はずれて 元字は「盤春連亭」だろ
う。「連」は特に異論も有るうが、追
悼句中に「連」が三箇所有り、いず
れも類似の崩しで、文脈上「連」以
外に読めないのが、桃僊の癖字だと
見たい。

C 勸農鳥



ほととぎす 勸農鳥は『大漢和辞典』
にも出てこない。小学館『日本国語
大辞典』の「かんのうちょう」で
「春現れ「田を作らば作れ、時過ぐれ
ば実らず」と鳴き、農業を奨励するとい
う俗説による)鳥「ほととぎす(杜
鵑)の異名」とある。「ほととぎす」
からでは引いても出てこない。
*荷笠が駒形新宿で寺小屋を開いて
いたという説は、桃僊門下での友人

奥津宏(汲古・雁江)後の八王子斯文
学院長の事績の誤伝である。

「爽やかな話」

本号に「曾我山の砲兵陣
地と下曾我駅の空襲」を執
筆された市川一郎さんは、
当初、上曾我の暴れ川「岩
太郎川」の原稿を寄せられ
ていた。

ところが、下曾我小学校
六年生一同が郷土研究で、
市川さんを訪問した。題目
は岩太郎川であるを知り、
児童たちにかみ砕いて教え
た。そこで、市川さんは、
「岩太郎川」の原稿を前記
の「曾我山の砲兵陣地と下
曾我駅の空襲」に切り替え
た経緯がある。さらに市川
さんは、新原稿を掲載の「小
田原史談」No.179を児童たち
に贈らうと計画された。

このことを聞いた「小田
原史談」を印刷する(株)アル
ファでは、市川さんに50部
を無償提供することにし
た。

この二つの爽やかな話
を、そのまま放つて置くこ
とは惜しい気がして、ここ
に記すことにした次第。

笹子嶺也 雲能

晴間耳勸農鳥

六花苑梅僊

紀元二千六百年(一九四〇)

釜土(竈)を語る

小野 薫

「舟原バス停」から林道を歩むこと約四十分、昭和二十年(二五)頃、入植により形成された久野(小田原市最西端の和留沢)に着く。ここから左に曲がり、諏訪の原・総世寺の元地だった亥切屋敷を過ぎると字釜土に到着する。

ここは、何時ごろから釜石山と呼んだ所である。其処からは、釜土石が採掘され、石材として明治、大正、昭和初期迄に久野村の特産物「久野石」と称して盛んに近郷に販売された。久野石は、今のコンクリートブロックや大谷石と異なり、火にも水にも強く、釘を打つこともできた。その利点を買われ倉庫や防火壁に或いは釜土石に広く利用された。

採掘の権利者は、小林、田中、杉本、一寸木ら数名で、大口注文には組合方式で取り扱い、小口は各自でこなし。

その石材の搬出には、引子と呼ばれる運搬専門がい

て、日に何度も荷車や馬力車で山を下ったという。

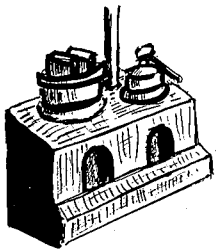
久野あたりの農家では、土間に並んだ「釜土」(竈)あるいは「久ど」とは別に「へつつい様」とも呼んだ火防の神である秋葉さんの御札と火の用心の赤い貼紙が、一層「へつつい様」を土間の主人公に仕立てたのである。

昭和の初期までは「へつつい様」の回りの土間に米俵が積まれ、土間の梁から吊るされた丸太に藁藁が掛けられ、鉄や鎌が其の家の人数ほどに暗闇で光っていたものだ。真ん中には木の風呂などが据え付けられその向こうには木の臼やラツキヨウ瓶がよく転がっていた。突然、鶏が飛び出し驚かされた事もある。夏には燕が梁に巣を掛けて子育てをするのも、ごく自然に見られた風景であった。

農家での普通の煮炊きには、板の間の囲炉裏をよく使い、釜土では、茶釜で湯を沸かし釜で飯を炊いた。

特にお正月には清め塩をした釜土に餅つきの蒸籠が何枚も重ね蒸された。上手な飯炊きのコツは、始めとろとろ中パツパアとは赤子泣いても蓋とるな。一筆啓上火の用心おせん泣かすな馬肥やせ」と共に、大正生まれの頭の隅には何時までもこびり付いている。農家の嫁姑の仲の幾多の悲喜を釜土は語らないが、多くを知っているだろう。だからこそ「へつつい様」は、お勝手場の神様であった。地方によっては、嫁入りの際、花嫁だけが勝手口から家に入って「へつつい様」に詣でて奥座敷に上がる仕来りが残っていたという。ドイツでさえ、これと似た習俗のあることを読んだことがある。

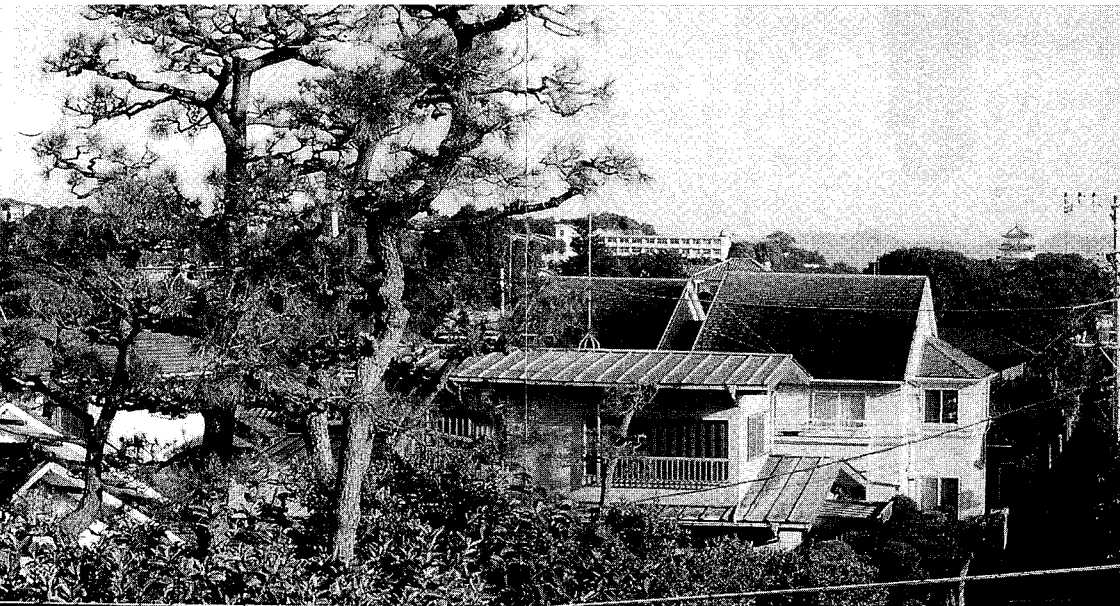
しかし、土間もかまども時代の流れの中に押し流されてしまった。釜土よ、かまどよ、長い間本当にご苦労様でした。



小田原市南町から

城山方面
箱根外輪

を望む

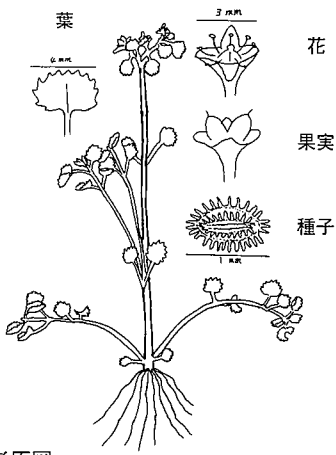
(右手は
天守閣)

丹沢の植物

④1

城川四郎きがわしろう

イワネコノメソウ (ゆきのした科)
Chrysosplenium echinus



筆者原図

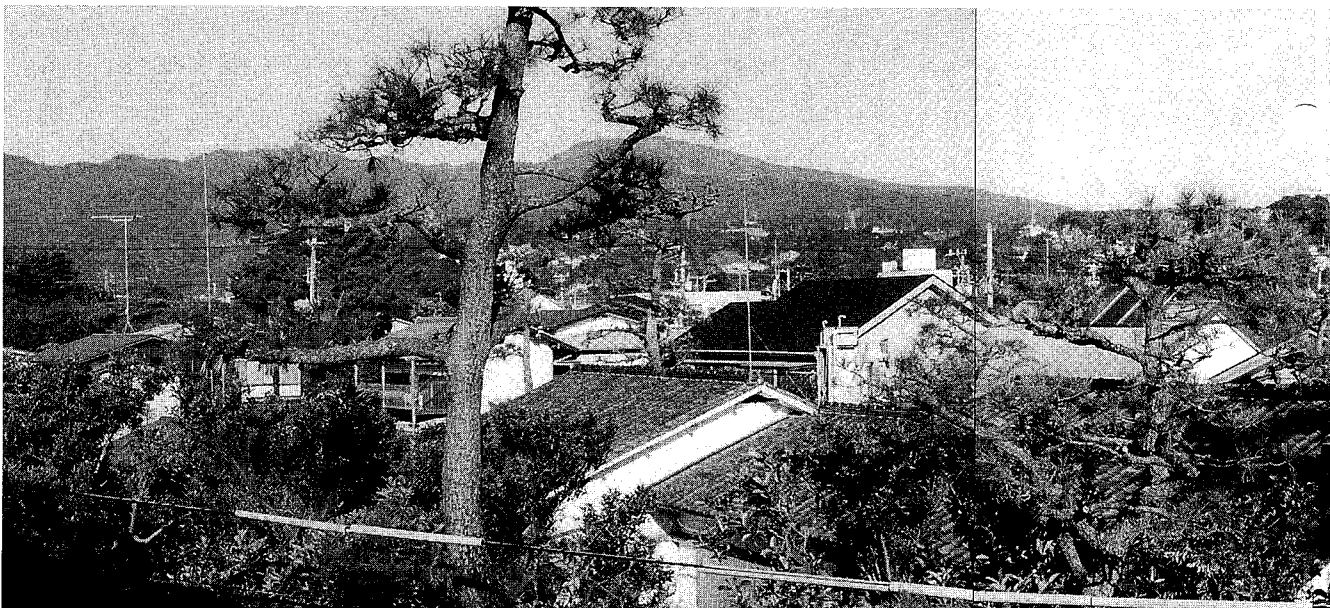
厳しい冬が終わり、小川の水もぬるむ頃になると、その水辺でさっそく花を開く植物たちがいる。その一つにネコノメソウ類という仲間がある。ネコノメソウの名は、果実の裂け目が細いの上から見ると、明るいところでの猫の目の瞳孔の細いのを連想させるからということであるが、そんな名前の思い付きは猫見眼晴草という漢名にあるという。その漢名の植物はネコノメソウではなくトウダイグサのことである。ネコノメソウ類はいずれも背が低

く、地面に這いつくばるように生えるものが多いので、植物に関心のある人でなければ、ふだんはその存在に気がつかないことが多いと思われる。しかし、花期には他の植物に先がけて、小さいながらもそれぞれ種類によって固有の花を開き存在をアピールする。早春、山麓の谷間を散歩して、ふと足元に眼をやるとかれらがまぶしげに貴方を見上げているかもしれない。さて、ここで紹介するのは、ネコノメソウの仲間でもブナ帯の溪流のほとりな

どにしか生えていないイワネコノメソウである。同じネコノメソウの仲間でもカゴネコノメなど花の様子のよく似ているものもあるから、さつさと歩きながら種類を確かめるのは無理で、それらしい植物に出会ったらしやがんでよくよく観察しなければ確認できない。それでも確信がもてないときは、その種子を持ち帰って実体顕微鏡で拡大して種子表面の模様を確かめる必要があるのが厄介である。小さい種子なのでルーペでは確かめにくい。

イワネコノメソウの特徴は花が緑黄色、全体ほとんど無毛、葉の鋸歯が鋭く明瞭、種子に細い棒状の突起が並ぶということである。花や実が着いているとき

でないときと見つけにくいので、五月ごろ溪流沿いの道などを下ばかり見ながら歩くと見つけることができる。分布は全国的であるが今のところ神奈川県では丹沢の高いところでしか確認されていない。環境的には箱根のブナ帯の溪流周辺を注意深く探せば見つかるのではないかと思っているが過去の記録はない。



残照の「うてな」

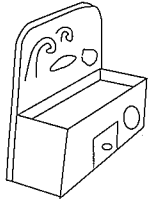
小田原城天守閣は、富士箱根国立公園をバックにして、太平洋上に、相模灘を一望するところに、聳えております。

この小田原城天守閣には、種々蒐集された品々が収蔵されており、博物館としての役割を果たしております。

それらの中には、源重之歌仙絵、「風をいたみ」と共に収蔵する品々があります。その一つに、身の廻りの小物整理に用いる、枕辺の置物があります。今日でいうならば就寝時に用いる「オーバーナイター」になると思います。

この木製指物の、色彩は、うすい赤黒色の、崩し塗りです。古い鎌倉彫の彫物が少ない、そんな感じもいたします。

四種類の模様がほどこされてあります。上部には、荒



波と、魚、そして紅葉、下部には、菊の花となっております。

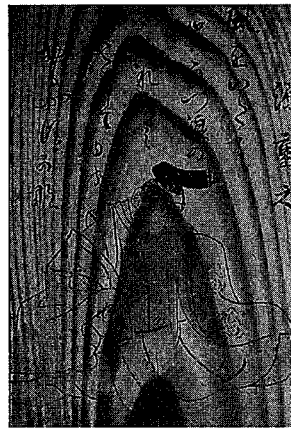
す。

上部は、背板のみで作られており、背板に描かれております。

下部は、箱状の指物で前面に比較して1/7程度の小さな引出しが中央に作られております。

引き出しを、外へ引き出

源重之 相模権守 源重之 日下部 庄一



線彫りにされている形ですが、小田原市章の梅花形の内法に使用されている一弁と似た形です。三角双彫りです。

これらは十六年前の私の記憶を辿ってゆき、それを参考にしながら書いておりますが、それぞれに、源重之の「ゆかり」を感じて

しますと、出した跡が空洞となつて、今度は空洞が入りとなり、左右へ小物を収納する隠れ納戸のように、使用出来ます。

引出しの取っ手には、銅作りの多弁菊花が付けられ



ております。先ず、上部の荒波模様についてであります。

おりますので目加田さくを先生(文学博士福岡女子大学名誉教授・梅光女学院大学名誉教授)の著書『源重之集全訳』(風間書房発行)から引用の、歌と引き合いをさせていただきます。

【通訳】
風が激しく吹き荒れるので、風に奔弄される波は岩にぶつかつて自分だけ砕けて飛び散つてしまふ。
そのように私ときたら、あの人が何とも思つてくれないので、あの波のように自分一人ばかり、心を砕いて思いなやむこのごろなんだよ。
【参考】小倉百人一首にとられて有名な歌である、詞花集七 恋上冷泉院春宮と申しける時、百首歌たてまつりけるによめる 源重之風をいたみいほうつなみのおのれのみくだけてものおもふころかな
玄々集 重之
風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけて物を思ふ頃かな
〔前掲書〕二七三頁より

りと合致するのだと思いましたが。
次の、魚模様は、荒波と魚で一組となり海を表わしているのだなと思ひました。
魚については、次のようなことがありました。
昭和五十八年頃でした。我が国では、伝統工芸を保護し、育成する目的で、同業種が一定以上の集団産地を形成するための伝統産業法が施行されていまして、当地でも、申請資料の用意を進めておりました。
行政の指導をいただきながら、資料作製に、資料の掘り出しに力をいれておりました。
この残照の「うてな」置き物についても、資料となるか、どうかの検討をしました。
その時の、小田原市、天守閣管理係長さんとは、旧知の間柄でしたので、気さくに話題を進めることができました。その上で係長は魚について「この丸い眼は、黄金キン、をそのままはめ込んでしまつて、いますよね。」と申されました。
伝産に指定される条件に

は、同種業者が三十社以上存在する、ことも含まれます。

私は、「これでは、趣向品のようで、産地製品であったとは考へにくいですね、」と申し上げて話しを終へたことがあります。

その時には、普通ではない、「作者」の、強烈な作意を感じ取った記憶が今でも残っております。

次のもみぢは、ブローチ大のもみぢ葉が木彫りされて、赤く塗られたものが嵌め込まれてあります。

もみぢばをおのがものともみぢがなみるにいさむる人はなけれど

「通釈」この美しい紅葉を自分の私有物としてゆつくり眺めたいものよ。「見てはいけない」と、なにも咎めだとしてみさせてくれぬ人がいるわけではないけれど、なにかこう、安心して見れぬような、落ちつかぬ気がするのだなあ。

〔前掲書〕六七頁

はつしものおかぬだ

にこきもみぢばのそのさかりをば たれにみせまし

「通釈」まだ初霜も置かぬのに、こんなに色濃くもみぢしているのもみぢばの美しさ、

これに、これから、霜が置いて一層鮮やかに染めあげるであろう、その絶頂の絢爛たる美しさを、一体たれにみせようかな。

〔参考〕新千載集 秋下 源重之

初霜のそめぬだに濃き紅葉の色の盛りを誰に見せまし

〔前掲書〕七〇頁

下部に嵌め込まれた、菊花は、十六弁であり、紅葉よりも更に大きめの、ブローチ大で浮き彫りにされております。

この整った十六弁の菊花を拝見していると、菊花を御紋章に定めたのは、十二世紀に、後鳥羽院が定めたと云ふ、通説を思い出しまいります。

しら霜のおきけるきく

を、りつれば たもとぬれてぞ いろまさりける

「通釈」白霜がたつぷりおいた菊の花を手折つたものだから、(うっかりしていた) 袂が露にぬれ

ちやつてねえ、おかげでかえって袂の色が濃く美しくなったことよ。

「語釈」○菊・中国渡来の花。万葉集には菊花を詠んだ歌はない。懐風藻以来、漢詩集には多い。菊花の宴が宮中催され、作文の場

となった。それが和歌の世界でも詠まれるようになったのは、これも平安朝に入ってから。躬恒、貞文らは菊を植えて自慢であった。宇多院から所望があり、国經大納言と菊

ことわらないが、菊の露に濡れそぼつた袂を不快、佻しくは感じていない。「色まさりけり」と快適、好感をもっているあたり菊の露、不老長寿の靈力ある露の威勢が意識下にあつたとみておく。

「参考」・国經大納言、女達と貞文の庭の菊のよすがに交際がある。

大正期のバラ作りのようにハイカラな貴公子の趣味が十世紀の菊作りである。昔家は築紫で菊の苗を入手して大変よろこんでいる。

〔前掲書〕二五八〜五九頁

下部中央にある小さな引き出しの使用方法是、次のようです。

低部に回みが作られていて、それが一組みとなるように、箱の低部には凸出出張りが作られております。

出っ張りは、割り箸大で、モノレールの様な一本「レール」が附着されています。レールにそって、手前に入し入れをいたします。

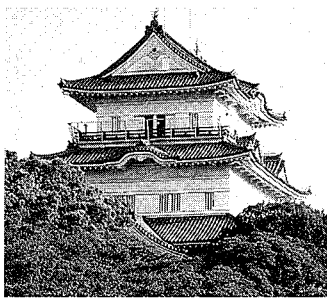
使用方法を念頭に置いて

考えられることは、いつの時代の作品でありましょうか、と、特別な生活の情景をかもし出しながら、重之「ゆかり」に思いをめぐらして。

歴史上の、宗祇、そして定家等の、歌道「ゆかり」の作風であるのかなあ。或いは、新族の末の「ゆかり」の作風であるのかなあ。

など、と考へながら、時限を超えて、空に聳ゆる、天守閣を見上げて、懐かしい気持ちになってまいりました。

今後も源重之の事跡に関心を持ち続けて行たいと思えました。



震災日記 ⑰

片岡永左衛門

大正十三年四月

二十七日 晴

矢来俱樂部に古書展覧を

見て『相州兵乱記』その他を買う。上野に錦絵の展覧を見て表慶館に入る。震災後初めてなり。(陳)列品以前と余り変わらず少し失望。三時五十分品川より乗車、帰宅。

留守中、戸松学瑛氏より来状あり。

註 東京芝・心光院住職。小田原市南町大蓮寺住職 戸松学童氏叔父。

二十八日 半晴

二十九日 晴

『郡書類従』借用しに柏木氏に立ち寄り。帰途は曾我氏の見舞いに寄る。

三十日 晴

五月

一日 晴

二日 半晴

三日 雨
午後二時より陶席。

四日 雨

『相中雜誌』補修参考に柏木氏より史籍集覧を借用す。

五日 半晴

問題の火災保険もこの程解決し、代理店引受けたる帝國火災保険会社、見舞金として金五千円迄割割以上を三步五厘の割合にて払い渡せり。

六日 雨

七日 晴

八日 雨

九日 晴

十日 晴

衆議院議員選挙にて、午前七時より仮町役場にて投票す。今回の解散後の総選挙のため競争激烈、政友会候補森恪は、当地政友会の

多くは本党に走りしたため、運動甚だ困難なり。

憲政会は、前回に落選の平川松太郎を候補とし、必死となり、政友本党は、土居貞彌を候補としたるも如何はしき運動常習屋長谷川、河野、星崎等の多きためと当地自称元老、所謂子分なき親分の運動にて甚だ不振。

十一日 晴

史跡参考に石橋佐奈田靈社に参詣。

といてみむ心もかなし古里を年もふる木のみ社の松

石橋夕照

潮あふる子らも帰りて夕日かけ波間にあかき石橋の里

十二日 半雨

本日衆議院、郡役所にて開票結果、平川松太郎当選す。拙者は、初め政友本党は、候補者の人柄面白からざりしと運動やその者も好めず、平川を投票と思ひおりたるも、森恪のため尾崎亮司懸命に奔走し、そのため前回は森派、今回は如何

なる故か土居に走りたる鈴木と衝突せしと聞き、死なば一門諸共との意気にて頼まれもせぬ森に投票せり。

土居は、前回今回共に落選して失望思いやらるるに、返つて改進黨以来未だ一回も当選せざりし憲政会の平川の当選にて大悦び。

十三日 晴

午後より陶席、中村敏夫来訪。

十四日 雨

十五日 晴寒し

十六日 晴

十七日

九時発にて松田より自動車に乗り、関本小学校に關野氏を訪い、史跡の質問せしに、当郡にては長坂太郎氏に及ぶ者なし、同氏に紹介を得て、また、自動車に乗り松田に帰り徒歩、金子(現・大井町)に長坂氏を訪問せしに、幸い在宅、幾つかの史材を得たるに、雨となり傘を借りて帰る。途中にて雨晴れる。

せき入し苗代水にかけ

見へてとくも過ぎゆく村雨の雲

はねあがり土にけかる靴をさへいとふまどなく晴るゝ村雨

十八日 晴

十九日 晴

帰途、関西郎方に立ち寄る。

二十日 雨

午前九時発にて、福住正兄翁墓前祭に参列。中食の地(馳)走なり。塔の沢一の湯に本店重役の小宴に立ち寄り止宿す。震災以来、当家の温泉に熱度増せしか随分臭気も増せり。

二十一日 半晴

本日は宮の下支店行きの予定なりしに、昨日雨にて道路破損し自動車不通のため帰宅し、塔ノ沢福住にて中食す。当家の温泉は震災以来熱度下がたり。

湯の宿の静けきひるを臥し居れば野の若はに細き雨ふる

この地は震災に両岸の山

崩落し被害少なからず。今に至も大雨毎に多少崩落あり。永住は勿論雨天には宿泊も面白き心地せず。

午後、親一来る。

二十二日 晴

親一、午前帰京。

二十三日 晴

陶席。史材の件にて川辺老人に面会。

二十四日 雨

沼田頼輔より来状、大学史料第十二回展覧招待券を惠与せらる。幸いに日曜なれば参観なさんか。

二十五日 晴

昨夜より大雨、四時頃に自覚めたるも。この雨にてはと、また、眠る。六時半頃起き出れば雨やみ日光をみる。俄に支度し八時十分に乗る。展覧中に東海道

絵巻あり。箱根の図に御殿と古城を記入ありしと小田原の図に天守五層なるに注意払い、帰途、横浜高田に立ち寄り七時半帰宅す。

二十六日 晴

展覧絵図に刺激され、帰途に独り史材の探尋を思い立ちて、加藤氏を訪問、古図を借覽せしに、此の図は先年の一覽せしが、その當時は字の記入に疑いあり為に注意を払いせしに、今見

れば現今存在中の最古図に大いに発明する処もあり借用して帰る。

二十七日 晴

帰宅後、昨日の古図に基づき小峯を踏査し、お鐘の台に至たりしに幸いに懇意の者に逢い種々益を得た。

二十八日 晴

今朝又、山王口を前年の記憶をたどり踏(査)せしに、幸いに知人に行き違い疑いを質し益を得て、弥々古図に信用も増した。

二十九日

三十日

阿部氏石垣の事で来訪。午後、中村亡義姉、中村亡義弟の追福のため福田寺上人拓請誂経供養す。

註 阿部氏 阿部為治。

大窪村板橋で和紙製造

註 中村氏 片岡永左衛門妻の実家姓

三十一日

六月一日 午後寄り雨

親一、龍夫帰省。夜に入り絵図借用に勝俣に行く。

註 親一、龍夫

片岡永左衛門の息子と孫

二日 雨

親一、龍夫帰省。夜に入り絵図借用に勝俣に行く。

二日 雨

昨日より稀なる大雨にて各地出水多く被害もあり。箱根辺も崩落あり、自動車不通、発電所も破損し電灯時々消ゆ。

借用の絵図、取り違わしたるに一箱あり。取り調べしに元牧島氏の所なりしが如く数多く有りしも、希望に返したり。一昨日、阿部氏の談話に欄干橋筋違の記入有る古図有りと聞けると

三日 晴

龍夫、徴兵検査なりにしに第二乙と決定、夕刻帰京。

四日 晴

夜に入り、板橋伴野熊吉に至り、小峯口、板橋等の伝説も疑問水解す。

五日 晴

勝俣より借用図の内、各関所、小田原城、各城門等を十七枚写す。

(六日記録欠)

七日 半晴

加藤より借用の地図写し始む。

八日 半晴

伴野談話に又疑いを生じ窪、久野に行き、夕刻帰宅。

九日 半晴

今日も絵図の謄写に十二時を過ぐ。

十日 半晴

本日、県会議員選挙、三人当選。改選毎に人柄下落。

十一日 半晴

板橋村鏡借覽す。勝俣より借用の諸図本を返却。

十二日 晴

史材採取に足柄村役場に行く。

十三日 半晴

小田原嘉永年間の地図、堀江氏より借用。

十四日 半晴

表の石垣出来ず。(つつく)

賞鑑句

剃る顔にふつと秋風匂ひけり 和田登仙

作者は小田原史談会、小田原俳句協会、共に古参の重鎮である。喜寿を疾うにすぎた方とは思えぬ旺盛な作句力には敬服している。

掲句は、日常茶飯のなんでもない生活の一齣が、平易なフレーズではあるが、読む人に克明にその仕草までが目に浮かび、初秋の風のさわやかさが身を感じられる。男性ならではの生活句として成功している。(剣持芳枝)

ぐれんどう さかもとやすのり
紅蓮洞・坂本易徳

③③

岡部 忠夫

〔前号〕辻村かね子が、養蚕のために、どのような種類の桑苗を植えたらよいかと、『函東会報告誌』編集主任の坂本易徳宛に質問の便りを出した。

函東会の賛助会員には、

地域の有力者が名を連ねている。今井徳左衛門、片岡永左衛門、吉田義方、向笠彦右衛門(吉浜村)、長谷川豊吉(曾我村)、福住九蔵(湯本村)、江島平八等四十七名である。その中に紅一点の辻村かつがいた。

辻村家に「かつ」について尋ねると、曾祖母に「かね」はいるが「かつ」はないと云う。「かつ子」は「かね子」と同一人物とみてよいと思われる。誤植も考えられるが、よく別名を用いる例があるからである。

辻村家と云えば当時、万年町の一丁田(現・小田原市浜町一丁目一番)に住む小田原屈指の素封家であった。

かね子は、明治七年(一八七四)の四十一歳のとき、夫に先立たれ、代わって所帯を張っていたのである。

桑を植えるのにどのような種類がよいかなど尋ねるあたり、彼女の並々ならぬ才知が窺える。同時に病弱の夫に先立たれ女手一つでたえこ、つうの二人の娘を東京の女子専門学校を卒業させている。

恒産があるとはいえ、なかなか大変なことであったろう。息子が無いため家を守り切り盛りしなければならぬ彼女が、天保四年(一八三三)の生れで、当時五十六、七の年齢になる。自ずと男勝りにならなければならなかったと思われる。

かね子の質問に答えた相沢鉄之助は、「貴方の質問と同じような考えでした。幸い日頃親しくしている農商務省農務局長がいますので、尋ねましたところ次の資料を得ましたのでお知らせ

せします」と、連絡している。それは、桑の数種類をそれぞれ、一反別に栽培し収穫される桑葉総量で得られる繭の数量と、一定の桑葉の数量を蚕に与えたとき得られる繭の数量を比較したものであった。

鉄之助がいくら東京農林学校を卒業していても、桑の種類のことまでは、知る筈はない。鉄之助の真面目な性質をかいま見るような感じがする。

相澤鉄之助が辻村かつに『函東会報告誌』No.3(明治二十二年十二月刊)に回答した年には、パリで万国大博覧会が開かれ、予てから評判が高かった人造生糸が出品され世人をあっといわせている。

このことについて『函東会報告誌』No.2(明治二十二年十一月刊)は、早々と紹介している。

人造生糸は、蚕の体内を経ないで化学的変化で製造するものである。後世に恐るべきものは、これらのことを指すに違いない。天創製造も人工に対して恐れられたじろぐ程ではないか、それは近々のことであろう、と伝えている。

しかし、人造生糸がわが国にスフとして登場するのは、昭和十一年(一九三六)頃で、スフが弱いものの代名詞として用いられたことは年配の人ならば、みな記憶に残るところである。翌十二年十二月になると商工省

は、規格でスフを綿製品に三〇%混入することを定めている。戦争経済に突入する先触れでもあった。

それまでは、小田原地方の農家でも、稲作の傍ら養蚕のため畑に桑を栽培したのも、一般的に見られた風景であった。

『函東会報告誌』には、しばしば、養蚕の記事が載っている。

足柄下郡の近傍は、本年(明治三十一年)気候不順なるにも拘わらず発生以来その生育至つて能く、聞くところによれば、酒匂村(小田原市)における横浜生糸商尾島源次郎氏養蚕場の蚕兒は、掃出以来生産最も

能く、早きは三眠桑付、普通三眠位。作柄は充分の見込にて今二十八日頃には繭を見るに至

るべく、其出来高は凡二十五石内外ならん。

ついでながら、おそらく坂本易徳が記したと思われる次のような記事が『函東会報告誌』にある。

学ことなれば見識異なるのみならず学校異なるれば氣風亦変化あり世人若し本郷三田神田の学校の卒業生途聞かば先づ左の問を起すなるべし

本郷に対して
あなたは何省にお勤めなさるか
三田に対して
あなたは何社に御出でなさるか
神田に対して
試験(代言人或いは判事の)御済みになりましたか

相澤鉄之助の場合は、東京大学の前身の駒場にある学校で、「何省にお勤めなさるか」は当てはまらない

そのころ、鉄之助は、一年志願兵になるのを決意していたと思われる。一年志願兵制度は、鉄之助が卒業

した年の明治二十二年(一八八六)二月二十五日に「一年志願兵条例」として公布されたばかりであった。

その制度は、官公立中学校以上の卒業資格を必要とし、在営中の費用は自弁であった。当時、国家財政が乏しいので、軍事費を支出しないので、陸軍予備幹部の養成が出来ないかと考え出された方策だった。服務期間の費用六十円を納付し、営外に居住通勤で、勿論、下宿代や食事費用は自分で

払わなければならなかった。その代わり兵種(歩兵騎兵・工兵等の区分)と衛戍地(陸軍が常駐する土地)は、自由を選ぶことが出来た。

鉄之助は入隊に先立ち、『函東会報告誌』No.3に「房州紀行摘録」と題して、感銘のあった景観八箇所を、それぞれ漢詩と和歌の二つに別けて発表している。その頃の時代の雰囲気とか、理系の学を修める者でも教養としての漢詩や和歌を必要とする時代であった。

鉄之助が一年志願兵として入隊したのは、明治十二

年十二月で、東京府麹町区にある第一師団第一騎兵大隊であった。

彼は既に、兄と共に住んだ麹町区飯田町四丁目二番地を引き払って、麹町区有楽町二丁目三番地石川留吉方に下宿していた。

鉄之助が騎兵隊に入隊するのを伝える『函東会報告誌』No.2の記事は、その時代の雰囲気伝えるもので、そのまま乗せよう。

本会員相澤鉄之助氏ハ去月東京農林学校ヲ卒業セラレ今般国民ノ義務トシテ一年志願兵出願ニ及バレシニ歩兵第一旅団長大勲位能久親王殿下ヨリ優渥ナル辞令書ヲ賜ハレタリ 神奈川県下実ニ氏ヲ以テ 嚆矢トス本会此人ヲ出ス本会ノ気運トスルニ足レルカ

鉄之助が入隊する直前の十二月八日の第二日曜日、函東会東京部例会が、京橋区肴町の文化亭で開かれ、二十余名が集まった。参加費は毎回五十銭である。令の値段に見合う金額を三千とすると、六千倍になる。

そのなかに坂本易徳や相澤鉄之助がいた。坂本易徳は手元不如意である。財布を叩いて参加したのである。

この会合は、互いに研究している概要を発表し、刺激し合う切磋琢磨の場であり同時に親睦を計ることを狙いとしていた。

坂本易徳は研究中の心零宗を発表した。心零宗がどのようなものかハッキリしない。あるいは、零は靈とすれば心靈研究なのかも知れない靈魂の神秘に関心を寄せたのであったのだろうか？

相澤鉄之助は、「馬相」の話をしている。人相と同じように馬にも相があり、気が荒く人を噛んだり足蹴りする馬がいる、といった類の内容であったのであろうか。ともかく、鉄之助の心は既に騎兵隊にあったに違いない。

坂本易徳が『函東会報告誌』に発表した内容を見ると、「衛生心理学」「やすみ物語」「七ヲ以テ整除ス可キ数ノ性質ニ就テ」「経済学ノ起源及ビ進歩」(下山格三と合訳)「算術教授論」「科学

と史学」といろいろな分野にわたっている。それだけではない。桃天子というペンネームで超短編とも云うべき小説もどきものを載せている。

見方を変えれば焦点が定まっておらず、それだけに気が多くて纏まったものは無い。

後年、文学評論家の瀬沼茂樹は、坂本易徳を「雑文家」としているが、彼には生涯を通してこれという著作が無いからであろう。

一方、鉄之助は、入隊した翌二十三年(一八九)三月二十九日から四月十八日までの愛知県で実施された陸海連合大演習に参加している。この時の状況は陸軍部内で発表されなかったらしい。そこで鉄之助は、獣医の立場から『函東会報告誌』No.10に発表している。この報告から、当時の騎兵大隊の編成をうかがい知ることが出来て興味深い。後年、旧陸軍の極秘とされている内容も、当時はそれを発表しても別に咎められず、軍はまだ、その点は、厳しく無かったらしい。

鉄之助の報告の要点を記

しただけでも相当の長さになるので、参考までに馬匹の輸送について簡単に触れて見よう。

一個中隊の馬匹は、隊馬が、百十頭、将校馬が九頭の計百十九頭であった。この資料だけで騎兵一個中隊の編成が分かる。馬匹は、演習地まで有蓋貨車一輛に六頭を搭載し、その車輛に兵卒十二名を配置し、必要な乾草を各馬当たり約一貫目(約三・七五kg)携行し、馬匹搭載に一時間十分を要したという。

鉄之助は騎兵大隊に入隊したが、娑婆とは縁が切れなかった。三時になると下宿に戻ることが許され、時間的にゆとりがあったからである。先に記したように制定されたばかりの幹部候補生であったために、その処遇が甘かったと言えるかもしれないし、またそれを許容した時代でもあったといえよう。彼は『函東会報告誌』No.7に「農業熱心家に告ぐ」と題して、駒場東京農林学校試験園で栽培果樹、桑苗と園芸用種子の斡旋をする、また、農林学校の參觀を希望すれば同道すると広告している。(つづく)



↑小田原みなとまつり→



小田原・箱根産業まつり



←初めての趣向 かごかきバトル

小田原市立図書館にて

品名	単価
高級本道地	105
高級のぼり(本道)	55
高級のぼり(本道)2枚	65
高級のぼり(本道)3枚	75
高級のぼり(本道)4枚	85
高級のぼり(本道)5枚	95
高級のぼり(本道)6枚	105
高級のぼり(本道)7枚	115
高級のぼり(本道)8枚	125
高級のぼり(本道)9枚	135
高級のぼり(本道)10枚	145
高級のぼり(本道)11枚	155
高級のぼり(本道)12枚	165
高級のぼり(本道)13枚	175
高級のぼり(本道)14枚	185
高級のぼり(本道)15枚	195
高級のぼり(本道)16枚	205
高級のぼり(本道)17枚	215
高級のぼり(本道)18枚	225
高級のぼり(本道)19枚	235
高級のぼり(本道)20枚	245

街

さ

ま

ざ

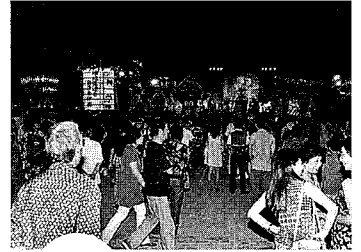
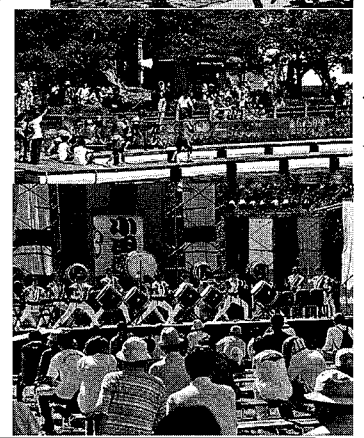
ま



小田原市民会館にて



小田原城址にて



8/31ビブレ閉店



厚底スタイル→



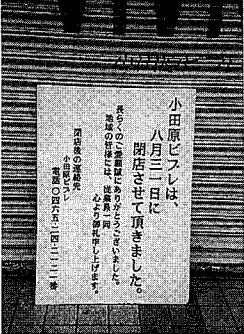
売らんかな厚底ブーツ

煙草を喫う一つのスタイル→

ルーズソックス小学生まで波及湯河原にて↓



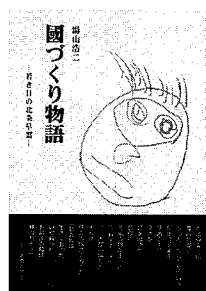
国府津駅にて



新刊紹介

◇国づくり物語

—若き日の北条早雲—



著者 湯山 浩二

発行者 北條 龍彦

A5 三二六ページ

定価 千六百元

発行所 早雲を語る会

〒二四八—〇〇〇一

鎌倉市二階堂二一五

☎045-1248-0001

振替口座 002501人上五四四

伊勢新九郎(のちの早雲)

が、応仁の乱の始まる三年前の春、叔父の伊勢貞親に呼び出され、備中荏原から京にのぼり室町御所の申次衆の末席に加えられるところから内容は始まる。そして、日野富子や一休や、回想場面で那須余市の末裔の娘「影姫」などを登場させ、興味深く読ませるのも創造力豊かな筆力によるもので、歯切れよい文章で展開も小気味良く、流石だと思

う。筆者が昭和五十八年度文化庁舞台芸術創作奨励特別賞を受賞したのも頷ける。

◇魔道に魅入られた男たち

—播磨期の考古学界—

著者 杉山 博久

発行者 雄山閣出版

A5 二二五ページ

定価 二千八百円

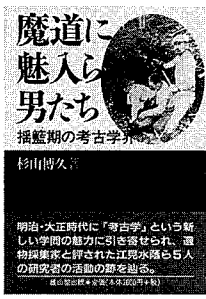
発行所 雄山閣出版

〒100-0001

東京都千代田区千代田

明治から大正期にかけて、考古学という新しい学問がもつ不思議な魅力—江見水蔭は、これを魔道と云った—に取り憑かれて、人生のある時期を、遺跡発掘に没頭した五人の男たち、江見水蔭・水谷幻花・高島唯峰・野中完一・上羽貞幸の活躍を通して、黎明期の日本考古学界を描く。

桜井清彦氏(早稲田大学名誉教授)は、「序」を寄せて、「大学関係者を中軸とする考古学および関係学問分野の展開に見えかくれする民間の考古愛好者の業績を見事に浮き彫りにした労作」



◇関左禅林の禅風

—早川海蔵寺僧堂について—

講演 岸 達志

編集 青木 良一

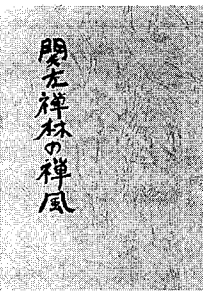
発行 東京院坐禅会

小田原市久野二五五

☎045-133-3334

東泉院住職岸達志氏は、とかく敬遠されがちな禅について、毎年展覧会と解脱の講演会を開くなどしている。今回は、去る四月二十五日、小田原市内八小堂のホールで講演をされた。折角の内容をその儘にしておいては消えてしまうと、東泉院坐禅会に参加している青木良一氏がとりまとめたものである。内容は、「早川海蔵寺」「正法眼蔵」「月潭老人」「三人の逸材」「坦山の逸話」「佐藤実英老師」「内山愚童のこと」「愚童の時代背景」「命がけの生き方」に分かれるが、最後の結びの項は別にして、あとは早川海蔵寺に関連のあることである。とりわけ、「月潭老人」は道元、一休、沢庵に比べると無名であるが、「正法眼蔵」の原点は月潭にあり、それを継いで明治・大正に「正法眼蔵」を広めた

と評する。



関左禅林の禅風

西有穆山、総持寺の貫首になった畔上棟仙、曹洞宗大丛林総監になった原坦山の「三人の逸材」は、月潭の禅風を慕って海蔵寺僧堂に入門したという。

海蔵寺は、かつて板橋の香林寺、久野の総世寺と共に曹洞宗小田原三山の一つに数えられるほどに、立派な寺院であった。現在、その衰微を嘆く人もいるが、現在、本堂を再建中であり、荒廢した寺院は昔日の面影は無理にしても復興することであろう。

本誌希望者は発行元にご連絡下さい。

郷土誌目次紹介

戦争と民衆

教師、戦争について語る

編集 戦時下の小田原地方を記録する会

No.42 8・15 A5 36ページ

話し手 村瀬 克己

証言 小田原に縁故疎開して

証言 教師として戦前・戦後の教育にたずさわって話し手 星崎 茂

証言 小田原に縁故疎開して話し手 村瀬 克己

三人の証言を聞いて

訃報

飯田峰さん(小田原市寿町四一—一四) 去る六月二十九日逝去されました。

享年六十六歳

難波常子さん(小田原市南町四一—一八) 去る八月八日逝去されました。

享年七十三歳

山口一郎さん(小田原市南町一—一十二) 去る九月二日逝去されました。

享年八十二歳

ご冥福をお祈り致します。

小田原市栄町三二—三二二

井上 弘方

証言「教え子を再び戦場に送らない」教師めざして話し手 志摩 亨

証言 教師として戦前・戦後の教育にたずさわって話し手 星崎 茂

証言 小田原に縁故疎開して話し手 村瀬 克己

証言 小田原に縁故疎開して話し手 村瀬 克己

三人の証言を聞いて

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
 小田原銀座 アオキ画廊
 熱海 アオキクリニック
 足柄香粧株式会社
 飛多魚屋
 紳士服の アメリカヤ
 (株) アルファ
 伝統工芸 石川漆器(株)
 税理士 石原和夫事務所
 伊勢治書店
 (株) 伊豆箱根トラベル 小田原
 画材 カクブチ ヲウエ
 (株) かまぼこ
 株式会社 小田原魚市場
 (株) 小田原ガス
 小田原市農業協同組合
 小田原報徳自動車
 (株) オートセンター・スギヤマ
 (株) 小田原中央青果
 オリオン座
 かまぼこ籠
 鐘紡株式会社小田原工場
 力本ボウ化粧品鶴宮工場
 神尾食品工業(株)
 木地挽 日下部産業(株)
 かみやま小児科クリニック
 興電社
 小伊勢屋
 小国府津館
 (有)小松石材店
 さがみ信用金庫
 崎村学院

趣味のごぶく さくらい
 (株) 正栄堂
 杉山水道工業(株)
 小田原 秀考のかまぼこ
 石寿堂スポーツ
 大営不動産
 邦とうん 小田原城趾前田毎
 網元直 交る海
 (株) そびそ二宮
 茶半家具株式会社
 ちん里う本店
 土谷建設株式会社
 角田ガクフ子店
 東京電力(株)小田原営業所
 株式会社 東華軒
 トホ一建物(株) 花店
 鳥かつの書
 和菓子菜堂
 八小子マ書
 八井書
 株式会社 報徳
 建築金物(株) 星崎仲吉商店
 家庭金物
 本多時計店
 松坂屋
 丸マルク
 諸星運輸グループ
 株式会社 美濃屋吉兵衛商店
 曾我の梅子
 嶺字・かまぼこ
 みみづく幼稚園
 ヤオマサ株式会社
 山口菓子舗
 防災器具 優光社

岡本 史郎
 【20世紀と我が人生を語る①】
 父から教わった大切なもの
 飯田 耀子

証言 国府津の鳥取部隊
 話し手 砂川 哲夫
 【地域で戦争を伝えるもの
 を調べて⑤】
 ・開成町・西南戦争戦死者
 の碑 矢野 慎一

落穂集

◎花魁が花魁道中で履くよ
 うな高下駄を連想させる履
 物を、何と云う商品名があ
 る店の店員から聞いてみ
 た。「それはアツパンと呼ん
 だ。」それはアツパンと呼ん
 だ。「それはアツパンと呼ん
 だ。」の答え。アツパンは厚
 か、パンの意味は、瞬間分
 からなかったが、パンプス
 の略かと思いついた。しか
 し、それだけではもの足ら

ないので、違う店で聞いて
 みた。「厚底と呼びますが
 な」その答えが余りにも断
 定的であったから、もう一
 軒で聞いてみた。「正式な名
 称はないんですが、一般に
 は厚底とか厚底靴とよんで
 います」。まだ決まった名前
 など無いと考えていただけ
 に、何となしに満足した思
 いがした。ところで、近頃、
 この三つの店頭には、いず
 れも厚底のブーツが並んで

いる。アツパンと云うのも
 ピンとこない。そのような
 言葉が使われる筈がない。
 念のために大型店の売場で
 聞いて見たら厚底のブーツ
 ですという。それにしても、
 ルーズソックスと云い厚底
 といいつつまで流行するも
 のやら。
 次号(来年一月発行予
 定)の原稿締め切りは、
 十月末です。

前役員の城山地区担
 当の広瀬康子さん、同
 じく鴨宮地区担当の小
 泉邦夫さんのお二人に
 は、『小田原史談』の
 配布や会費集金などに
 十五年もの長き間、ご
 奉仕頂き有り難うござ
 いました。
 厚くお礼申し上げます。

小田原史談(年四回発行)

年会費 普通会員三千元